

2017 年度 IR 推進委員会報告

仙台白百合女子大学

2017年度 IR推進委員会報告

1. 大学職員の業務に関するアンケート調査
2. 教育費 【平成30年度予算(平成23～30年度予算・決算推移)】
3. 志願者及び入学者データ
4. 退学者調査
5. 奨学金調査
6. CAP・GPAの導入に伴う学習動向に関する調査
7. 学生生活調査(4年生対象：卒業近時期)

大学事務職員の業務に関するアンケート調査（報告書）

宮下ひろみ・白川 充・石岡宏美

はじめに

昨今、大学運営の改善や充実には、教員の在り方とともに事務職員ならびに事務組織の在り方が問われるようになり、中央教育審議会においても、大学による組織的な研修・研究（スタッフ・ディベロップメント（SD））の重要性や、教職協働による事務職員の大学運営への参画の重要性などの審議が重ねられて来た。その結果、2017年4月1日より学校教育法の大学設置基準等の一部改正がなされるにいたり、第2条の3に、新規として「（教員と事務職員等の連携および協働）」の条項が加わった。また、第41条の「事務を処理するため」との規定は「事務を遂行するため」と改められ、さらに、新設された第42条の3には、「職員に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修の機会を設けること」と改正された。

改正へいたる経緯として、さかのぼること1998年10月の大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について一競争的環境の中で個性が輝く大学-」答申*1に、大学の事務組織の業務の専門性や効率性の向上の必要性が明言化されている。2008年12月の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」答申*2では、大学職員の職能開発（スタッフ・ディベロップメント、SD）の重要性が述べられている。次いで2014年2月中央教育審議会大学分科会「大学のガバナンス改革の推進について」審議とまとめ*3では、事務職員の高制度化による教職協働の実現について言及している。2015年6月から2016年3月までの分科会でも大学事務組織についての検討がなされており、なかでも2016年12月の第44回大学教育部会における委員発言の記録から、大学運営における大学職員の役割の重要性やSDの義務化といった、今回の学校教育法の大学設置基準等の一部改正が決定的にいたった経緯がみてとれる。

本学の大学運営の改善や充実においても、例外なく事務職員ならびに事務組織の在り方の見直しが必要である。これまでも事務職員等を対象とした意識調査を行ってきたが、ここに改めて調査を行い、その結果をもとに本学の事務職員ならびに事務組織の在り方の課題を明確化し、本学のよりよい大学運営につなげることとする。

- *1 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について一競争的環境の中で個性が輝く大学-」答申 第2章大学の個性化を目指す改革方策 3 責任ある意思決定と実行-組織運営体制の整備-5) 大学の事務組織等（1998年10月26日）
- *2 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」答申 第3章学士課程教育の充実を支える学内の教職員の職能開発 2 大学職員の職能開発（2008年12月24日）
- *3 中央教育審議会大学分科会「大学のガバナンス改革の推進について」審議とまとめ III 大学のガバナンスの改革の推進について 2 学長のリーダーシップの確立 (1) 学長補佐体制の強化（高度専門職の安定的な採用・育成）（事務職員の高制度化による教職協働の実現）（2014年2月12日）

1. 研究目的

IR推進委員会では、本学の運営における事務職員の資質向上並びに事務業務体制改善のための情報収集の一環として、事務職員の業務に関する現況ならびに意識に関するアンケート調査を実施することとした。調査結果を基礎資料として業務に関する本事務職員の現

況把握を行い、課題を明確化することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象職員

本学の専任事務職員（助手を除く）34名（男性16名、女性18名）。

(2) 実施日

2018年1月15日（月）～1月31日（水）

(3) 調査項目・アンケート用紙（資料添付）

(4) 調査方法

無記名の自記式調査用紙を配布し、留め置きとし、庶務課設置の回収箱による回収。

(5) 回収率と分析対象

回収率は76.5%（配付34名で回収26名）26名を分析対象とする。

(6) 集計と分析方法：単純集計

<経過報告>

- 7/31 第2回推進委員会会議を受けて担当の決定（白川、宮下、石岡）
- 9/20 第3回推進委員会会議にて推進項目と判断、WGの結成（白川、宮下、石岡）
- 10/ 2 第1回WG会議（アンケート調査のための勉強会）
- 10/16 第2回WG会議（アンケート調査項目と体裁の検討）
- 10/23 第4回推進委員会会議にて進捗状況報告（目的とアンケート調査項目提案）
- 11/13 第3回WG会議（アンケート調査用紙並びに調査対象・方法の検討）
- 12/18 第5回推進委員会会議にて進捗状況報告（アンケート用紙の提案とスケジュール）、同日3名の事務職員による事前テスト依頼（アンケートとチェックリスト配布）
- 12/26 事前テストの結果による修正版作成
- 12/27 依頼状とアンケート修正案を推進委員会メンバーへメール添付送付（メールにてコメント募集1/9まで）
- 1/ 9 最終案を推進委員会メンバーへメール添付送付（依頼状は12/27付けと同様）
- 1/15 アンケート調査用紙配布（留め置き自記式）
- 1/31 アンケート調査用紙回収締め切り
- 2/ 5 第4回WG会議（アンケート調査の粗集計の結果検討）
- 2/23 第5回WG会議（アンケート調査の結果まとめ）
- 2/26 第6回推進委員会会議にて進捗状況報告（アンケート調査の結果報告・経過報告）
- 3/12 第6回WG会議（アンケート調査報告書案の作成）
- 3/19 第7回推進委員会会議にて報告（アンケート調査の報告書の提案）

3. 結果

以下、設問毎に単純集計結果を示す。

図1は、設問1の(1)「これまで経験した部署（課）は何ヵ所ありますか？」というアンケート調査に対する回答、図2は設問1の(2)「本学での勤務年数は何年ですか？」という

アンケート調査に対する回答である。

本学での勤務年数は1年目から31年目までと幅広く、回答した職員も各年1名から3名となった。これまで経験した部署数は、最も多かったのが2部署で8名（30.8%）、次いで1部署5名（19.2%）、3部署及び4部署で各4名（15.4%）となり、最も経験部署数の多かった職員は7部署で1名（3.8%）となった。

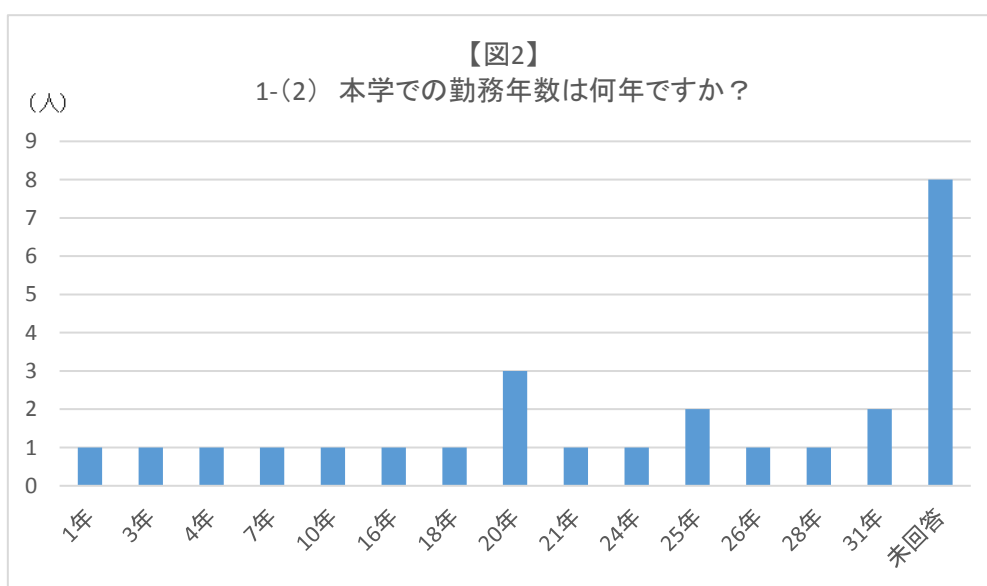
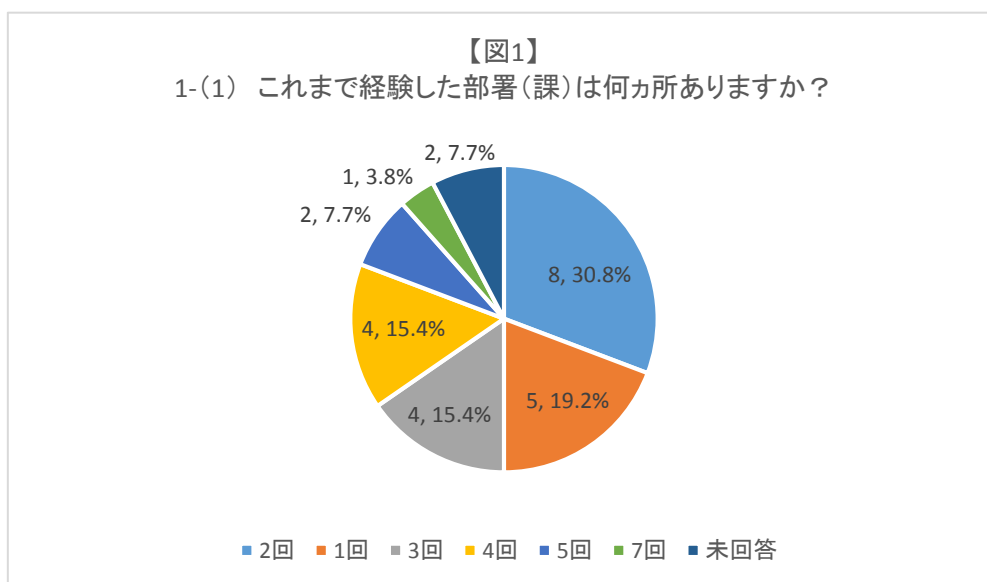


図3は、設問2の(1)「現在の部署におけるあなたの専門性について」というアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「ふつう」で13名（50.0%）、次いで「やや高い」が9名（34.6%）、「高い」が2名（7.7%）、「高い」と「やや高い」の合計が11名（42.3%）となり、「やや低い」が1名（3.8%）となった。

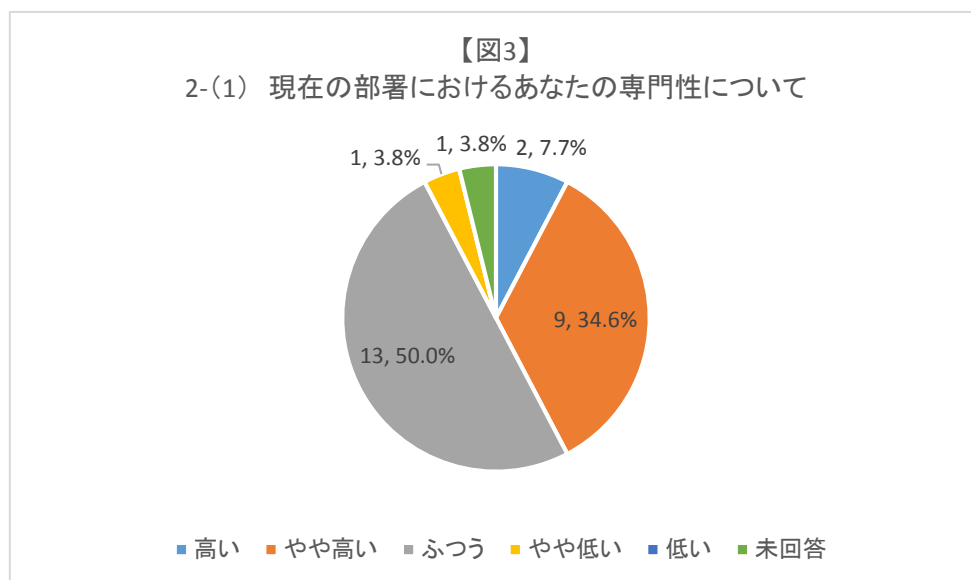


図 4 は、設問 2 の(2)「基礎的な業務内容の把握」について「部署内での日常業務」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役立っている」で 15 名 (57.7%)、次いで「どちらともいえない」が 6 名 (23.1%)、「役立っている」が 5 名 (19.2%) となり、「役立っている」と「やや役立っている」の合計が 20 名 (76.9%) となった。

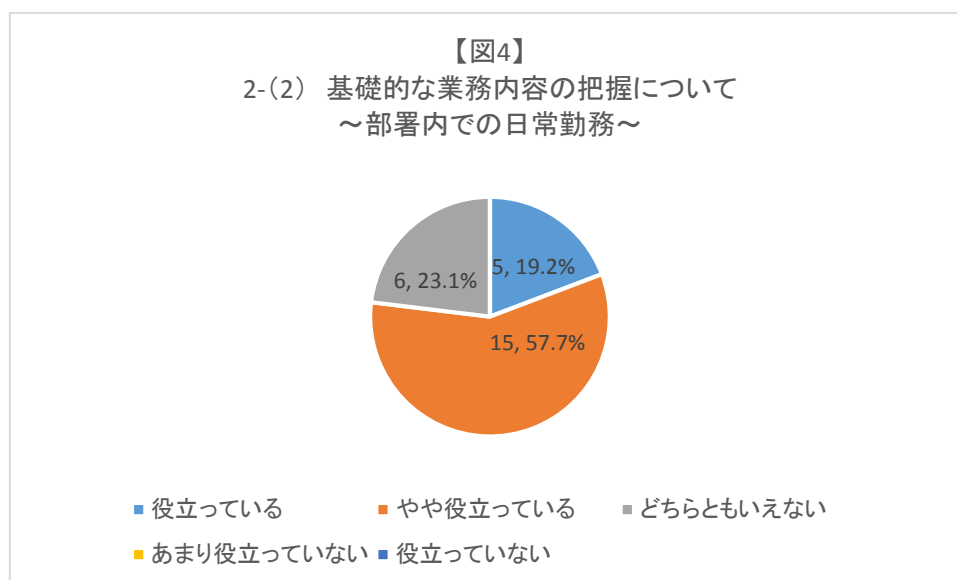


図 5 は、設問 2 の(2)「基礎的な業務内容の把握」について「学内の研修」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役立っている」で 12 名 (46.2%)、次いで「どちらともいえない」が 10 名 (38.5%)、「あまり役立っていない」と「役立っていない」が各 2 名 (7.7%) となった。

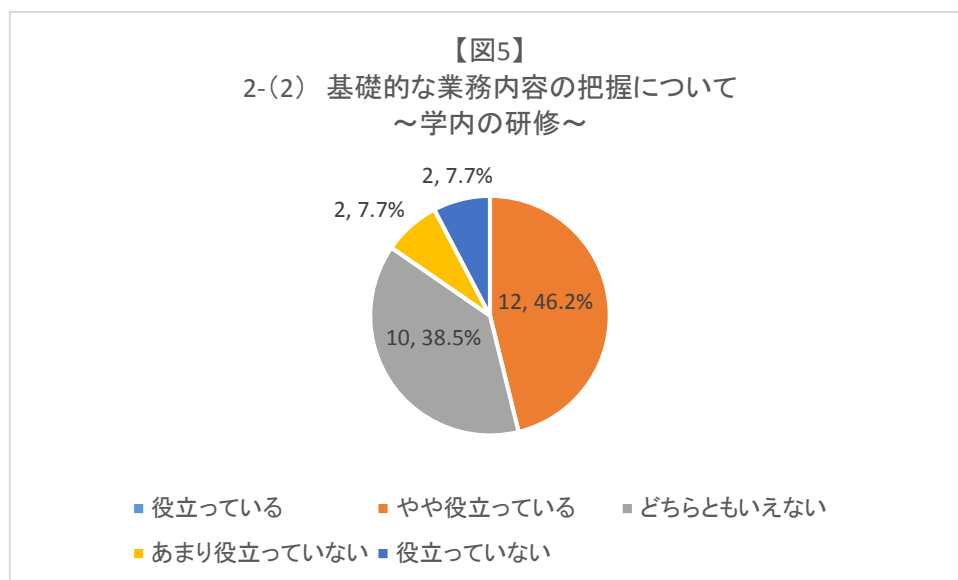


図 6 は、設問 2 の(2)「基礎的な業務内容の把握」について「学外（地域圏内）の研修」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役に立っている」で 10 名（38.5%）、次いで「どちらともいえない」が 9 名（34.6%）、「役に立っている」が 6 名（23.1%）となり、「やや役に立っている」と「役に立っている」の合計が 16 名（61.6%）となった。

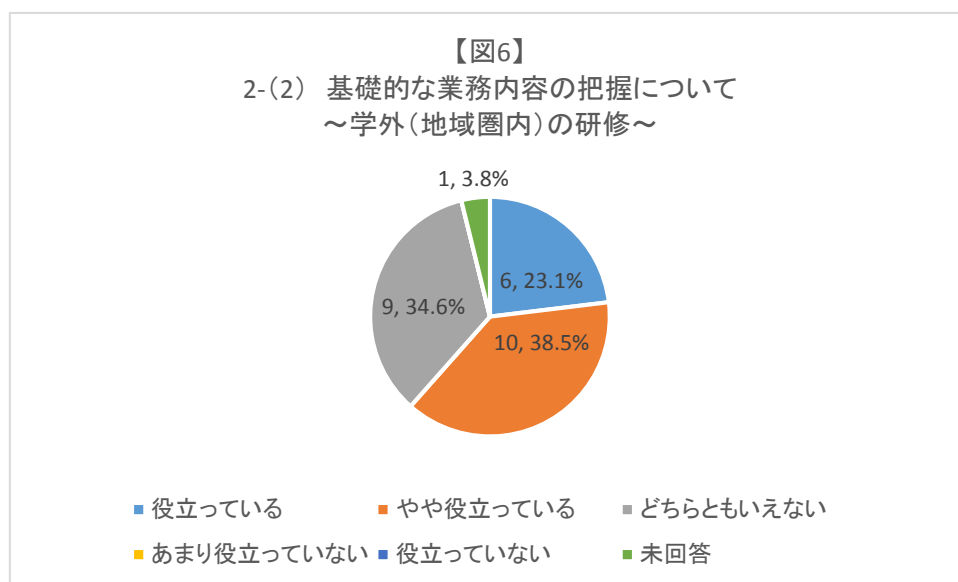


図 7 は、設問 2 の(2)「基礎的な業務内容の把握」について「学外（全国）の研修」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役に立っている」で 10 名（38.5%）、次いで「どちらともいえない」が 9 名（34.6%）、「役に立っている」が 4 名（15.4%）となり、「やや役に立っている」と「役に立っている」の合計が 14 名（53.9%）となった。

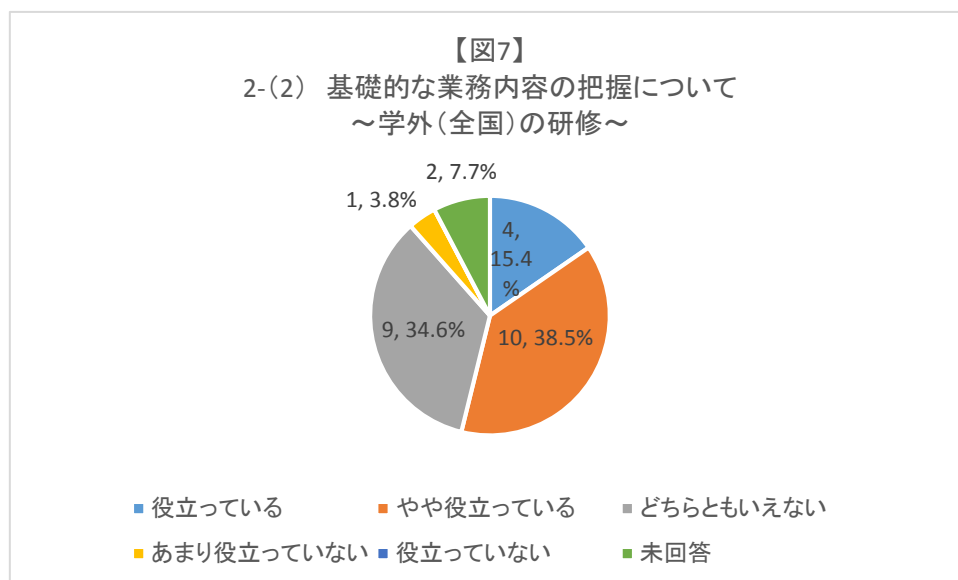


図8は、設問2の(2)「基礎的な業務内容の把握」について「自己研鑽(雑誌購読等)」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役に立っている」で10名(38.5%)、次いで「どちらともいえない」が8名(30.8%)、「役に立っている」が5名(19.2%)となり、「やや役に立っている」と「役に立っている」の合計が15名(57.7%)となった。

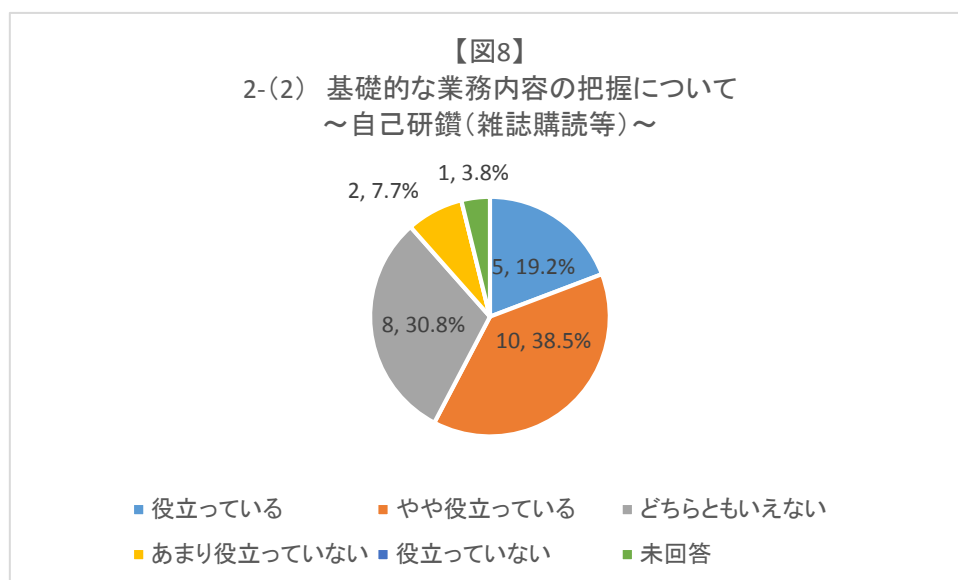


図9は、設問3の(1)「業務内容に関する習熟と資質向上」について「学内の研修」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「どちらともいえない」で11名(42.3%)、次いで「やや役に立っている」が10名(38.5%)となり、「あまり役に立っていない」と「役に立っていない」が各2名、合計が4名(15.4%)となった。

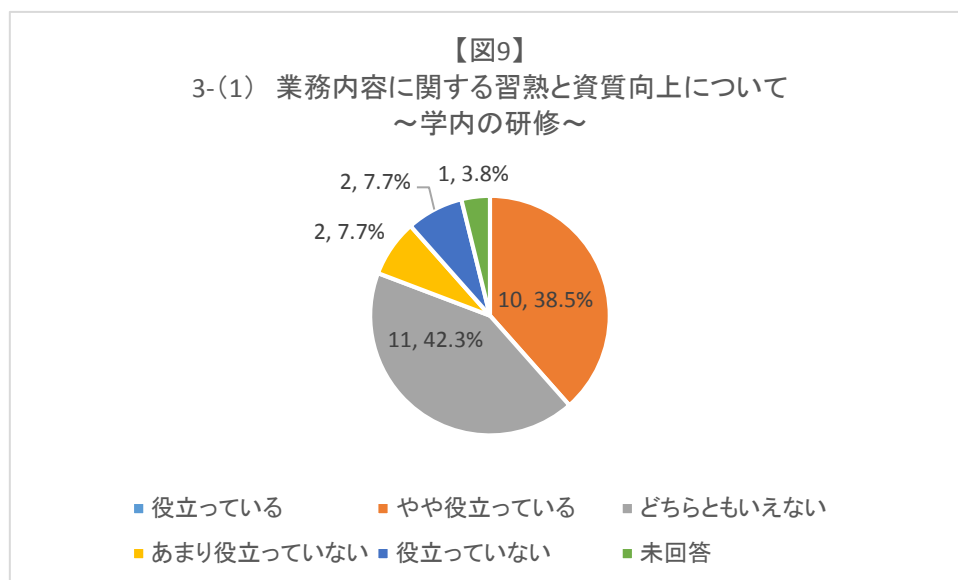


図 10 は、設問 3 の(1)「業務内容に関する習熟と資質向上」について「学外（地域圏内）の研修」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役立っている」で 11 名（42.3%）、次いで「どちらともいえない」が 8 名（30.8%）、「役に立っている」が 6 名（23.1%）となり、「やや役立っている」と「役に立っている」の合計が 17 名（65.4%）となった。

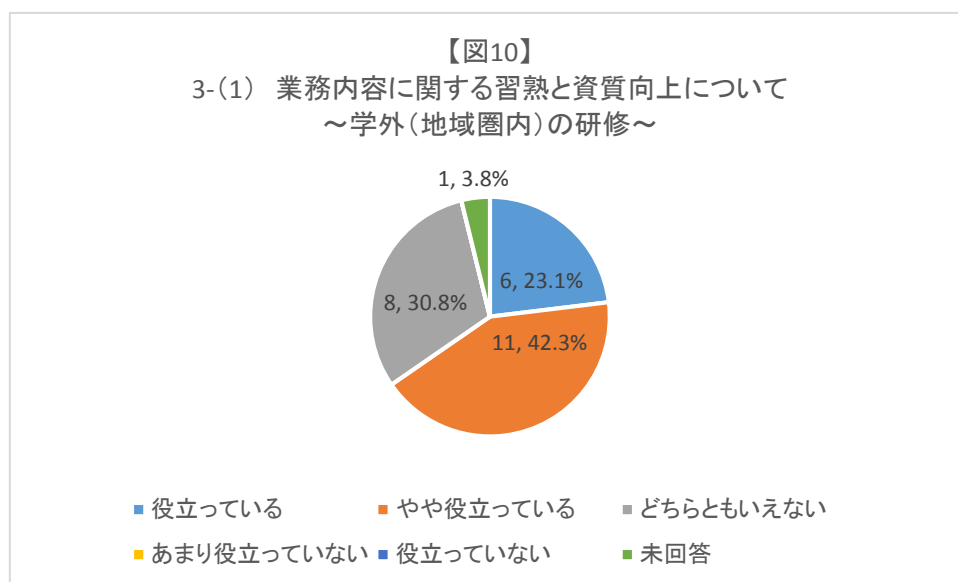


図 11 は、設問 3 の(1)「業務内容に関する習熟と資質向上」について「学外（全国）の研修」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役立っている」及び「どちらともいえない」で各 10 名（38.5%）、次いで「役に立っている」が 4 名（15.4%）となり、「やや役立っている」と「役に立っている」の合計が 14 名（53.9%）となった。

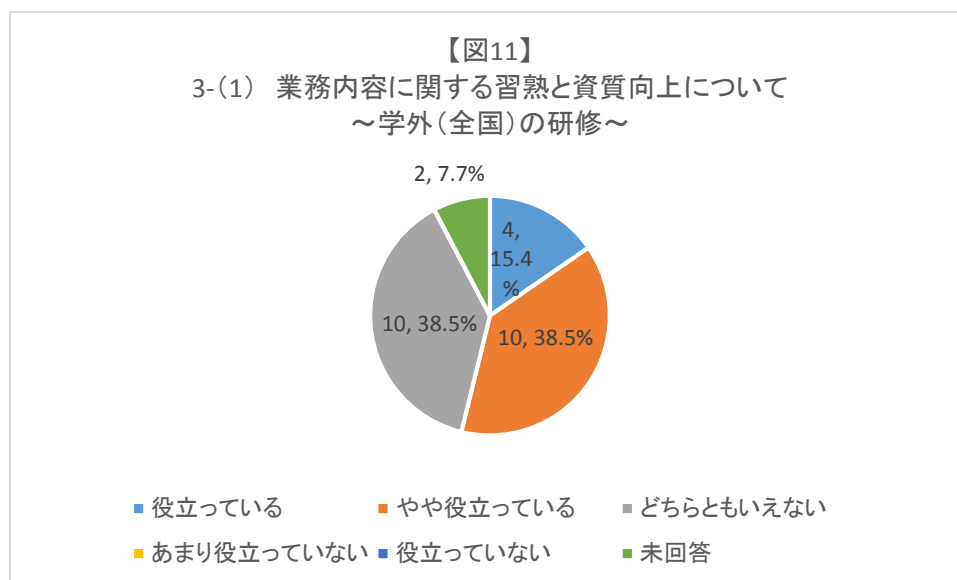


図 12 は、設問 3 の(1)「業務内容に関する習熟と資質向上」について「自己研鑽（雑誌購読等）」がどの程度の割合で役立っているかというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「やや役立っている」で各 11 名（42.3%）、次いで「どちらともいえない」が 7 名（26.9%）、「役に立っている」が 6 名（23.1%）となり、「やや役立っている」と「役に立っている」の合計が 17 名（65.4%）となった。

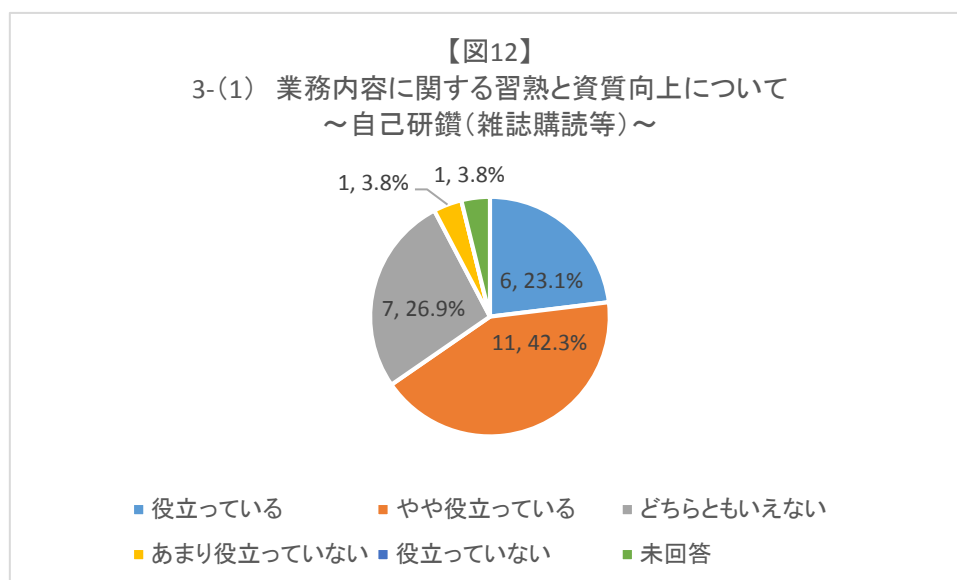
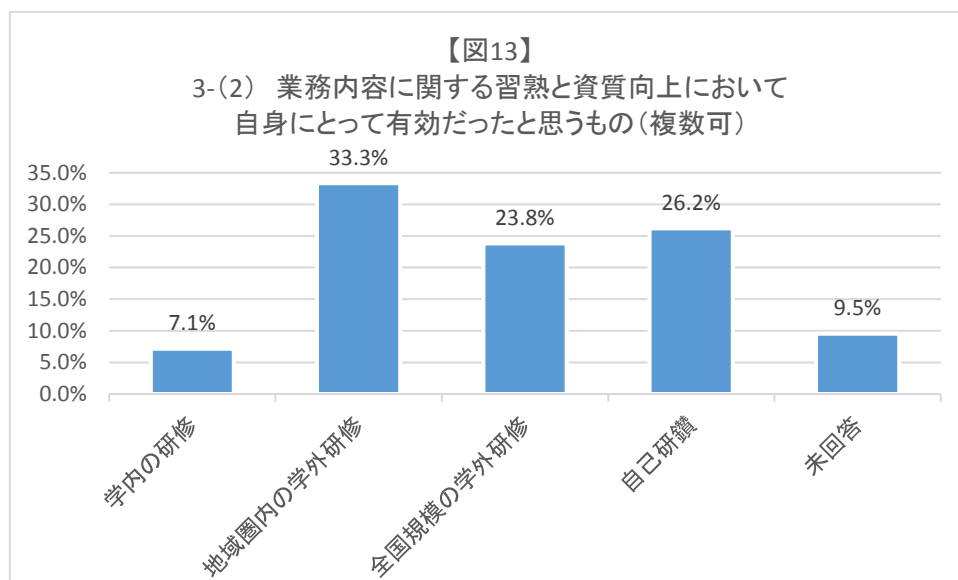


図 13 は、設問 3 の(2)「業務内容に関する習熟と資質向上」について「自身にとって有効だったと思うもの（複数選択可能）」と「具体的内容（記述）」のアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「地域圏内の学外研修」で 33.3%、次いで「自己研鑽」の 26.2%、「全国規模の学外研修」の 23.8%、「学内の研修」の 7.1%となった。



上述選択肢別の具体的記述内容を下に記載する。尚、記載内容は選択肢別に重複する。

○学内の研修

- ・教職員研修会。

○地域圏内の学外研修

- ・他大学での職員の業務内容、ノウハウをきくこと。
- ・他大学や高校の取りくみを知る。技術・知識の収集など。
- ・他大学の情報収集と研修は大いに資質向上に役立った。
- ・著作権講習会。
- ・日本カトリック大学連盟職員セミナー。

○全国規模の学外研修

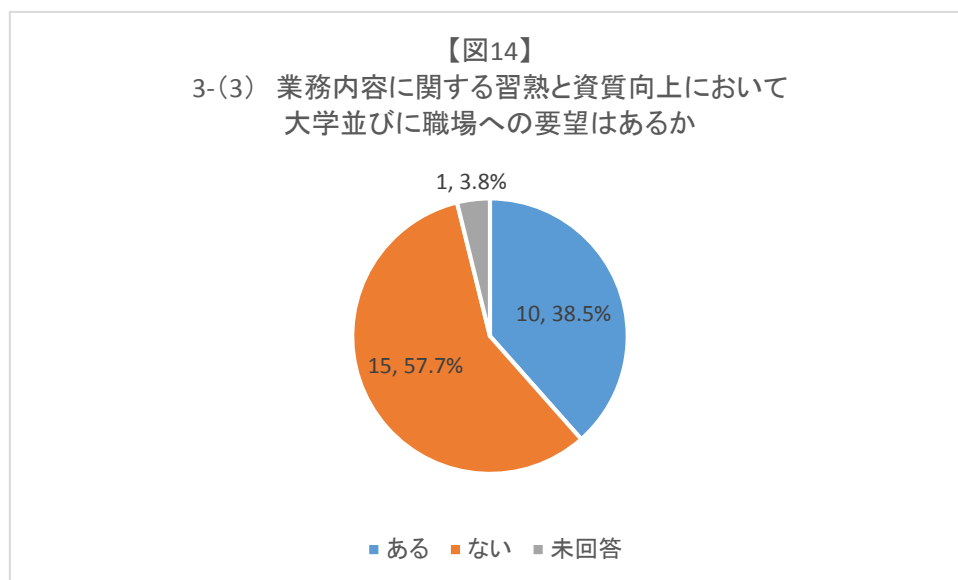
- ・他大学での職員の業務内容、ノウハウをきくこと。
- ・他大学や高校の取りくみを知る。技術・知識の収集など。
- ・八王子セミナーハウスでのコミュニケーションセミナー。
- ・同規模大学との情報交換。
- ・他大学の情報収集と研修は大いに資質向上に役立った。
- ・日本カトリック大学連盟職員セミナー。

○自己研鑽

- ・他大学や高校の取りくみを知る。技術・知識の収集など。
- ・日々の業務の積み重ねだと思います。
- ・日本カトリック大学連盟職員セミナー。

図 14 は、設問 3 の(3)「業務内容に関する習熟と資質向上」について「大学並びに職場への要望はあるか」と「あるとしたらどのような要望か（記述）」のアンケート調査に対する回答である。

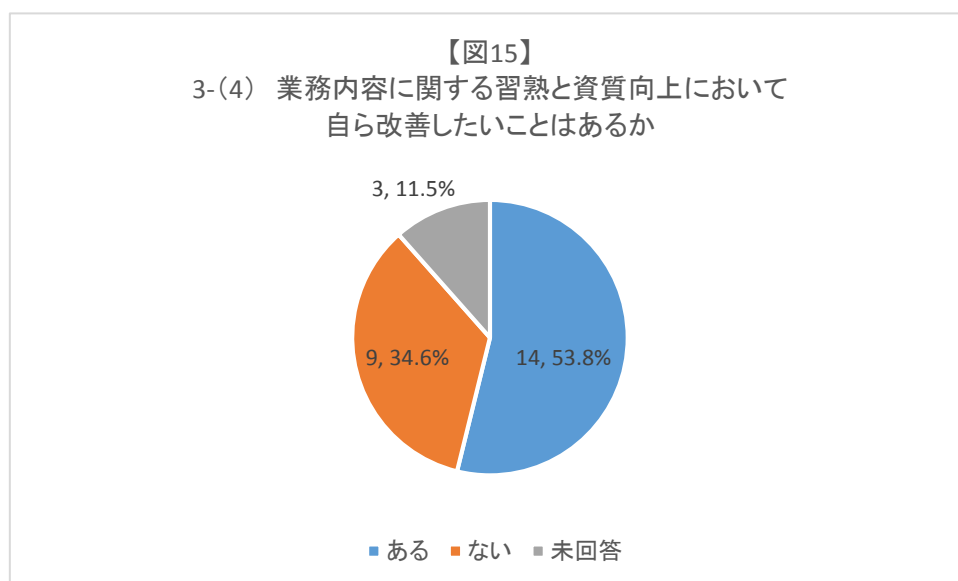
選択肢の中で、多かったのが「ない」で 15 名（57.7%）、「ある」が 10 名（38.5%）となった。



上述選択肢で「ある」と回答した職員の具体的記述内容を下に記載する。

- ・他大学の研究。
- ・定期的な面談、現状と目標の把握・共有、競合との比較、研究、対策、実行。
- ・学内の研修や学外の研修に行ける機会を増やしていただけると良いと思います。
- ・情報の共有、業務内容の見直しと効率化。
- ・FD 研修と SD 研修の分離。
- ・無計画な人事異動を止めてほしい。業務の習熟と資質向上にとって、マイナスの効果を生む。

図 15 は、設問 3 の(4)「業務内容に関する習熟と資質向上」について「自ら改善したいことはあるか」と「あるとしたらどのような改善か（記述）」のアンケート調査に対する回答である。選択肢の中で、多かったのが「ある」で 14 名（53.8%）、「ない」が 9 名（34.6%）となった。



上述選択肢で「ある」と回答した職員の具体的記述内容を下に記載する。

- ・ Noと言える強い心。
- ・ 知識・技術の向上。
- ・ もう少し自己研鑽が必要だと思います。
- ・ 積極的に発言・意見ができる環境づくり
- ・ 他部署のやり方をもっと参考にすること
- ・ 自身の業務範囲を超えた知識修得
- ・ 業務に必要な知識を得ること
- ・ 業務内容に関する専門性を向上するための資格やスキルを身につける学習をしたい。
- ・ 日々の業務におわれるだけでなく、専門性のある仕事ができるようにしたい。
- ・ 自分の専門分野以外の知識の貯蓄。
- ・ 利用者へのよりよい理解とより適格な対応。

図 16 は、設問 4「自身の資質・能力・キャリア形成」について、(1)「自身の問題解決能力」についてというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「ふつう」で 16 名 (61.5%)、次いで「やや高い」が 4 名 (15.4%)、「高い」及び「やや低い」が各 2 名 (7.7%) となった。

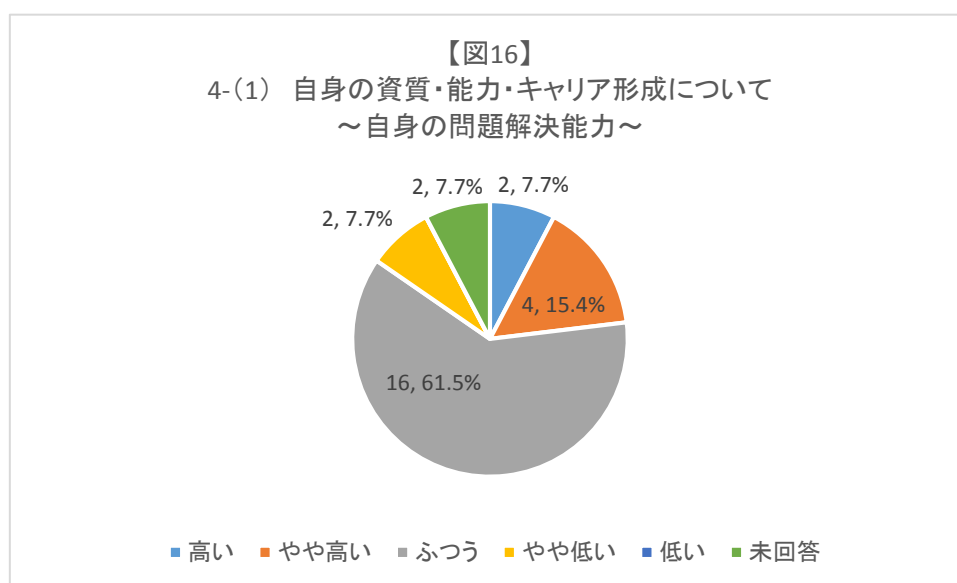


図 17 は、設問 4「自身の資質・能力・キャリア形成」について、(2)「自身の職業倫理観」についてというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「ふつう」で 15 名 (57.7%)、次いで「高い」が 6 名 (23.1%)、「やや高い」が 4 名 (15.4%) となり、ほぼ全員が「職業倫理観がある」と回答している。

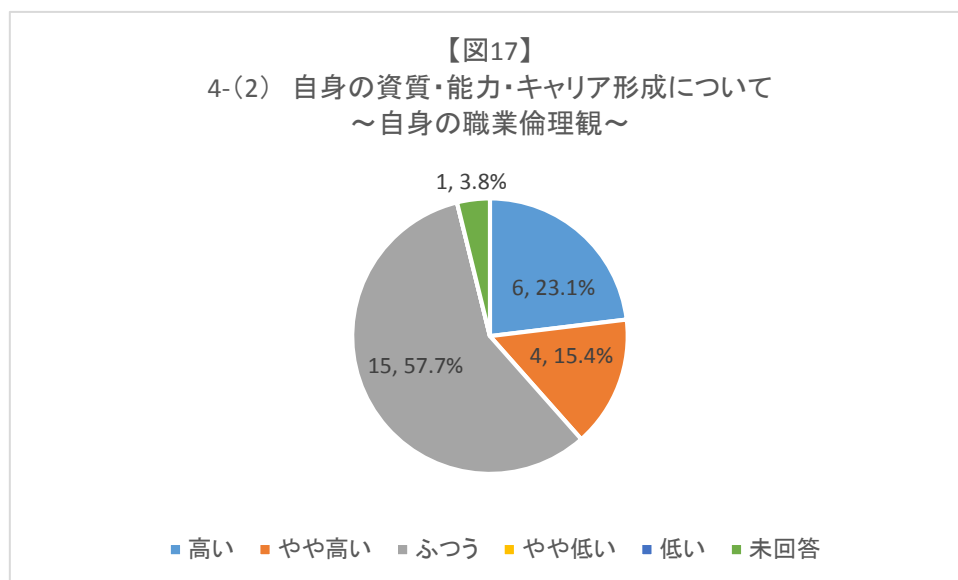


図 18 は、設問 4「自身の資質・能力・キャリア形成」について、(3)「自身のコンプライアンス（法令）遵守」についてというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「ふつう」で 9 名（34.6%）、次いで「高い」が 8 名（30.8%）、「やや高い」が 7 名（26.9%）となり、1 名を除きほぼ全員が「コンプライアンス（法令）遵守している」と回答している。

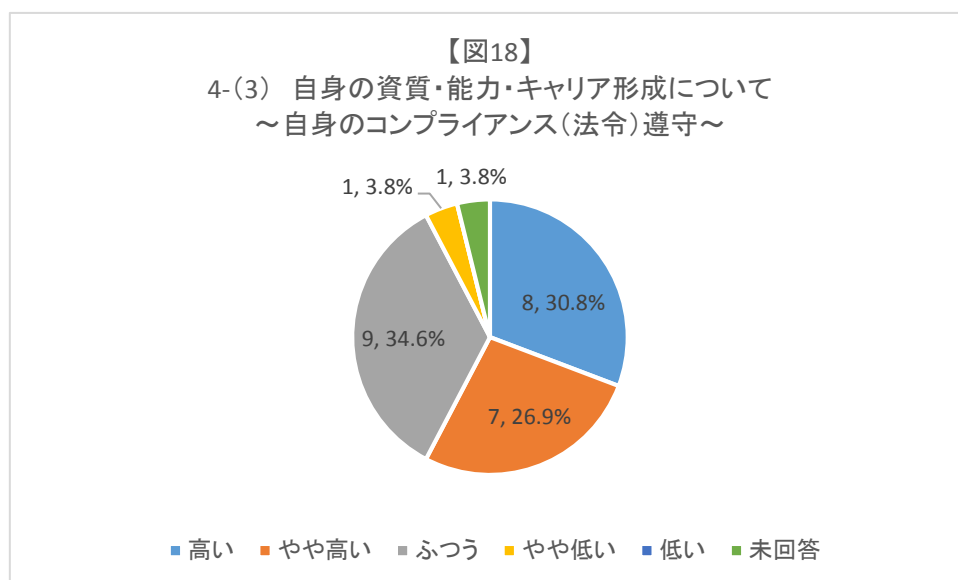


図 19 は、設問 4「自身の資質・能力・キャリア形成」について、(4)「自身のキャリア形成の計画性」についてというアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、最も多かったのが「ふつう」で 15 名（57.7%）、次いで「やや高い」及び「やや低い」が各 4 名（15.4%）、「高い」が 2 名（7.7%）となった。

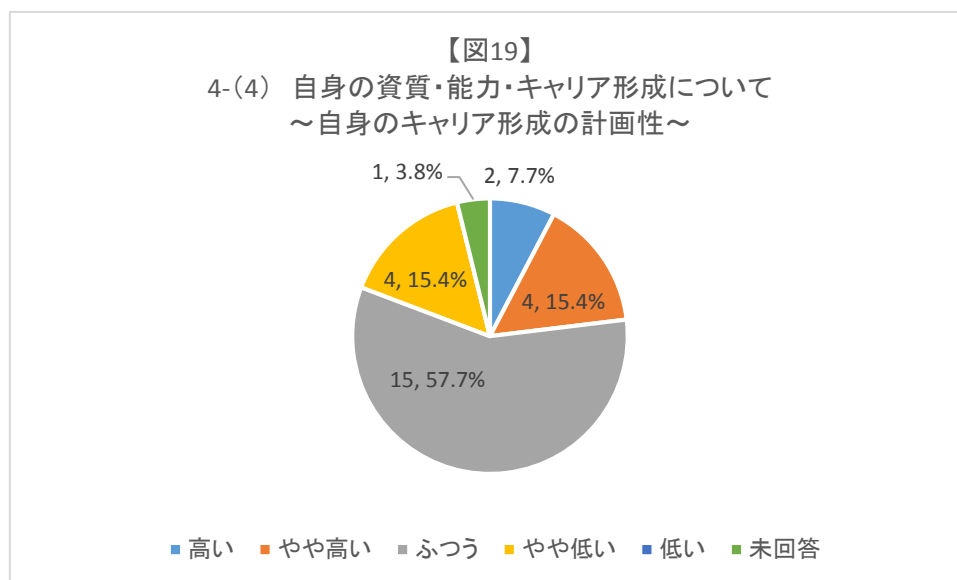
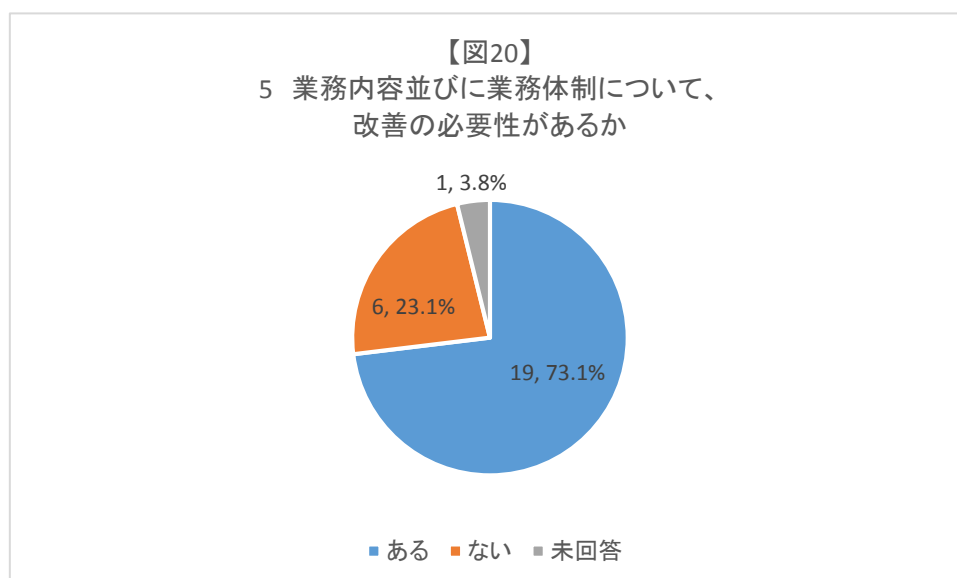


図 20 は、設問 5 の「業務内容並びに業務体制」について「改善の必要性があるか」と「あ
るとしたらどのような改善か（記述）」のアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、多かったのが「ある」で 19 名 73.1%、「ない」が 6 名 23.1%となった。



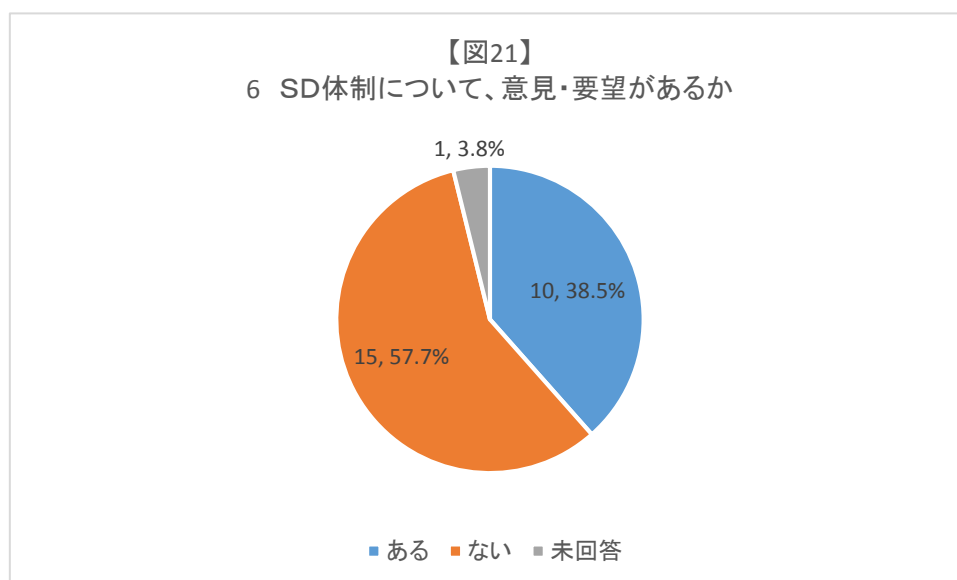
上述選択肢で「ある」と回答した職員の具体的記述内容を下に記載する。

- ・ どんなにルールに則り行動をしても一つの強い発言でルールが覆る風潮。みんなと同じ行動をとらねばならぬ風潮（個性が育たない、しいては個々の能力を活かせない）。
- ・ 職員の教員からの独立（権限増、立場の横並び）、競合対策、就業環境の良化、世代交代へ向けた育成・補充。
- ・ 行事の対応等の連携や情報共有が少なく、いまく行かない場合があると思います。
- ・ 業務と人数のバランス。
- ・ 教員との両輪を担えるよう、職員も力をつけること。

- ・組織論が通用しない点。
- ・大学運営の意思決定の公平性に疑問を感じる。経営責任を担う者は誰なのか明確にすると同時に民主的な運営が可能な体制を作ってほしい。
- ・終了時間を少しでも早めたいです。そういう努力をしたい。
- ・他大学のやり方など、良いものがあれば取り入れる。
- ・学務分掌（事務分掌）の見直し。
- ・各自の意識改革をどのように進めていくか、そして全体の協力体制をどう築いていくかという点で改善の必要があると思われる。
- ・増加し続ける業務への人員・人材の補充。
- ・職員の年齢構成、部署異動は適材適所を考慮して欲しい。

図 21 は、設問 6 の「本学の S D 体制」について「意見・要望があるか」と「あるとしたらどのような意見・要望か（記述）」のアンケート調査に対する回答である。

選択肢の中で、多かったのが「ない」で 15 名 57.7%、「ある」が 10 名 38.5%となった。



上述選択肢で「ある」と回答した職員の具体的記述内容を下に記載する。

- ・人事評価、面談、個人・部署の目標管理、今後の展望の共有（これらが無いのでキャリア計画や個人の長所・短所の自覚が希薄）。
- ・もう少し活発な活動をしていく必要があると思います。
- ・FD 研修と SD 研修の分離。
- ・教職員合同研修会以外の取り組みもあって良いと思います。
- ・各部署で行っている問題を月 1 くらいで出しあう（他部署の職務は見えないので）。
- ・各自の向上する意識が肝要と考える。
- ・教職員研修会は主に教員向けのため、職員独自の研修も行なって欲しい。

設問 7 は「大学職員としての業務や自身の資質向上についての意見・本学の S D 体制」について、「意見・要望」の自由記載に対する回答である。

- ・具体的な目標や数値が設定されることが少なく、ななあになることが見受けられる。(大学全体として) 業務においてPDCAの意識が低いように感じる。特にフィードバックの機会が少なく業務プロセス改善につながらないのではと思う。熱心に行動する人は損をするシーンが多いように感じる。チャレンジ精神を持って行動し、たとえそれが失敗におわってもどの点を改善すべきか考えて次につなげていくべきと思う。部署によってルールが違いすぎるのではないかと感じられる。全体最適化としての横割り業務が求められている現代において、部署間での業務の押しつけ合いはいかかなものかと。ルールの統一、チームプレーが必要。事務職ではなく、アドミニストレーターとして自覚が求められていると思う。
- ・もっと企業的視野がほしい。各分野で競合に勝つための分析・戦略は必須で、共有するべき。それを実行し、やり通す環境も作ってほしい。個人の自主的な資質向上を望むなら、定期的な面談によるふりかえりや目標管理は必要。教員の意思決定力が強すぎ。ボトムアップが少ない。できない。底上げや向上を目指すなら現場との意見交換や業務分担の質を上げてほしい。
- ・職員間でのちょっとした勉強会のようなものがあると良いと思います。
- ・長く行っている業務体制を見直す機会があるとよい。
- ・自身の不足している部分は学外の研修などに出て初めて気づかされることが多い。
- ・普通の組織を構築し、普通の評価制度を導入しなければ向上はあり得ない。
- ・参加のきっかけとなるように、自己研修休暇の設置はいかがでしょうか？(あるいはサバティカルのような?)。
- ・より良いサービスが提供できる様、資質の向上に努めたいと思っていますので、もし、大学の支援が必要になった場合は、ご助力頂ける様な仕組みがあると、大変有難いです。
- ・自分の資質を向上したいという思いは常に持ちながら、日々の業務を遂行しております。年をかさねてきたこともあり、より慎重さが増してきたような気がします。スピードよりは確実性ということでしょうか。私としては、機動性の向上が最大のテーマです。
- ・学外で行われる研修に参加すると、同業務を行っている人との交流があるが、自分がいかに仕事のできない人間かを痛感させられる。学内においてももっとアンテナをはって、自部署のみならず、情報を収集していくことが必要かと思う。
- ・個々がかかえている業務が多すぎて、研修があってもその内容が大ざっぱすぎて、業務内容とマッチしていない。
- ・職員に対し必要な知識を習得させ、その能力や資質向上させるための研修の機会をもっと充実する取組みが必要と思われる。

4. 考察

本調査は、「はじめに」でも述べたが、学校教育法の改正によって、今後の大学事務職員の役割と業務内容が変化し、特に「教職協働」の推進が求められることを前提としている。また本調査は、本学のIR活動の一環として行われたものである。以上の点より、ここでの考察の視点は、本学全体の内部質保証のための方策、関連して「教職協働」のための提言とする。

(1) 職員の部署経験と勤務年数の分析の必要性

設問 1 (1)「これまで経験した部署(課)」によれば、職員の部署経験は全体の半数が1～

2 か所であった。また設問 1 (2)「本学での勤務年数」によれば、職員の勤務年数は 20 年以上が 11 名、10 年以上が 3 名、10 年未満が 4 名であった。今回の分析方法は単純集計だが、「これまで経験した部署（課）」と「本学での勤務年数」をクロスさせるならば、そこにはどのような相関があるのだろうか。

大学における事務局組織は、人事計画の観点から、一定の異動周期を持つと同時に、その業務の専門性から、定期的な異動対象とならないポジションがあり、そのバランスが難しい組織であると思われる。本学の場合、そのあたりをどのように考え、部署経験をさせてきたのであろうか。また職員採用計画は、どのような構想に基づいて作られてきたのかという点も気になるところである。

通常、勤務年数と年齢構成は相関する。本学の事務局組織の高齢化とこれまでの採用計画についての検証が必要ではないだろうか。

(2) 体系的な学内研修体制の整備と計画的な学外研修への派遣計画の必要性

設問 2 の「基礎的な業務内容の把握」と設問 3 の「業務内容の習熟と資質の向上」に関しては、学内の研修、学外の研修（地域圏内・全国）、自己研鑽の有効性について聞いたものである。全体の傾向として「役立っている」「やや役立っている」が 10～15 人で回答者の半数程度を占めていた。

問題はその対象となる研修内容と範囲である。設問 3 (2) では「業務内容の習熟と資質の向上」に有効だったものを記述させているが、自分が参加した研修等の中から、印象に残っているものを挙げているように思われる。

大学における事務局組織は、その運営について一定の目標を持ち、それに必要な人材と研修体制を用意し、「求められる職員の業務と資質の向上」を図るものと思われる。以上のような観点に立つならば、本学事務職員の研修体制と計画について検討する必要があるのではないだろうか。

(3) 業務内容並びに業務体制の改善

設問 5 の「業務内容並びに業務体制の改善」については、全体の 70%を超える 19 人が「改善の必要性がある」と回答している。この点をどのように考えるかである。本学では、事務職員の業務内容と業務体制の改善について、どのような仕組みを持っているのであろうか。例えば管理職による検討、または第 3 者による検討、あるいは職員全体による検討など、業務改善のためのシステムが必要ではないだろうか。

(4) その他

自由記載においても有効な意見が述べられているので、いくつか拾ってみたい。

①設問 3 (3) にある「無計画な人事異動を止めてほしい。業務の習熟と資質向上にとって、マイナスの効果を生む」という意見は、人事計画の立案と専門性担保の問題に直結するものと思われる。

②設問 5 の「職員の教員からの独立（権限増、立場の横並び）、競合対策、就業環境の良化、世代交代へ向けた育成・補充」の前半部分は、まさに学校教育法における職員の位置と教職協働へつながるものであろう。

③設問 6 の「FD と SD の分離」は、研修体制の整備の問題に直結するものと思われる。

この他にも自由記載に書かれている意見は、検討すべき内容が含まれているように思われる。全体として、(1) ～ (3) に示した事務局組織として取り組むべき課題と、同時に事務職員個々人においても「自己研鑽」が求められると言えよう。

おわりに

本調査は、IR 推進委員会活動の一環として、「本学の運営における事務職員の資質向上並びに事務業務体制改善のための情報収集」を目的に、事務職員の業務に関する現況ならびに意識を把握するために実施したものである。結果として、本学事務職員の業務と意識について、また事務局組織として検討を要する事項があることが明らかになった。

最後に本調査に関する問題点（限界）について触れておく。ひとつはアンケートに使用した用語の定義が不十分であった。例えば「専門性」という用語を使っているが、その中身については明確にしていない。またその専門性が高い、低いという表現を使用しているが、何をもって高いとするかという点についての吟味も不十分であった。その点では、「専門性」に関しては、各回答者の認識のみによるものとなった。今後、業務内容の明確化や、「専門性」の評価基準を設定して行く必要があると考えられる。もうひとつは分析方法についてである。今回は単純集計に留まった。それは時間的、労力的な限界があったためだが、より詳細な分析を行うべきであったと思われる。これらの点を今後の課題としたい。

2018 年 1 月 15 日

仙台白百合女子大学
事務職員各位

仙台白百合女子大学 IR 推進委員会

大学事務職員の業務に関するアンケート調査の依頼

この度、IR推進委員会委員会では、大学運営における事務業務体制の改善並びに事務職員の資質向上を目的に、事務職員の業務に関する現況ならびに意識に関するアンケート調査を実施いたします。アンケート結果は、本学のIRに関する基礎資料として活用させていただきます。なお、調査内容につきましては、目的以外に使用することはありません。

記入時間は、15分程度です。ご多用の折とは存じますが、何卒ご協力くださいますようよろしくお願い申し上げます。

ご記入いただきましたアンケートは、**1 月 31 日（水）**まで、**庶務課**に設置してあります**アンケート回収箱**に**提出**をお願いいたします。

大学事務職員の業務に関するアンケート調査

大学運営において、事務業務体制の改善並びに事務職員の資質向上を目的に、その基礎資料とする本学事務職員の業務に関する現況ならびに意識に関する調査にご協力くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。なお、この調査内容につきましては、目的以外に使用することは一切ありません。

1. あなたの本学における所属部署経験と勤続年数についてお答えください。

- (1) これまで経験した部署（課）は何カ所ありますか？ （ ）カ所
 (2) 本学での勤務年数は何年ですか？ （ ）年

2. 基礎的な業務内容の把握について以下お答えください。

- (1) 現在の部署におけるあなたの専門性について、当てはまるところに○をつけてください。

高い	やや高い	ふつう	やや低い	低い
----	------	-----	------	----

- (2) **基礎的な業務内容の把握**について、以下の方法はどの程度の割合で役立っていますか。
 当てはまるところに○をつけてください。

部署内での日常勤務	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
学内の研修	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
学外（地域圏内）の研修	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
学外（全国）の研修	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
自己研鑽（雑誌講読等）	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない

3. 大学事務における業務内容に関する習熟と資質向上について、以下お答えください。

- (1) あなたの行っている業務内容の習熟と自身の資質向上の方策について、以下の方法はどの程度役立っていますか。当てはまるところに○をつけてください。

学内の研修	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
学外（地域圏内）の研修	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
学外（全国）の研修	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
自己研鑽（雑誌講読等）	役立っている	やや役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない

- (2) 業務内容に関する習熟と自身の資質向上の方策について、自身にとって有効だったと思うものに○をつけ、具体的なものをお書きください。（複数可）

ア.学内の研修 イ.地域圏内の学外研修 ウ.全国規模の学外研修 エ.自己研鑽
 具体的に（ ）

- (3) 業務内容に関する習熟と資質向上において、大学並びに職場への要望はありますか。

ある ない

あるとしたらどんな（ ）

(4) 業務内容に関する習熟と資質向上において、自ら改善したいことはありますか。

ある ない

あるとしたらどんな（

)

4. 自身の資質・能力・キャリア形成について、以下お答えください。

(1) 自身の問題解決能力について,当てはまるところに○をつけてください。

高い	やや高い	ふつう	やや低い	低い
----	------	-----	------	----

(2) 自身の職業倫理観について,当てはまるところに○をつけてください。

高い	やや高い	ふつう	やや低い	低い
----	------	-----	------	----

(3) 自身のコンプライアンス（法令）遵守について、当てはまるところに○をつけてください。

高い	やや高い	ふつう	やや低い	低い
----	------	-----	------	----

(4) 自身のキャリア形成の計画性について、当てはまるところに○をつけてください。

高い	やや高い	ふつう	やや低い	低い
----	------	-----	------	----

5. 本学における業務内容並びに業務体制について、改善の必要性がありますか。

ある ない

あるとしたらどんな（

)

6. 本学の SD 体制について、ご意見・ご要望がありますか。

ある ない

あるとしたらどんな（

)

7. 大学職員としての業務や自身の資質向上についてのご意見・ご要望をご自由に述べてください。（自由記述）

[illegible]

ご協力まことにありがとうございました。

1月31日（水）まで庶務課設置のアンケート回収箱に提出をお願い致します。

<承認印>	学長	学部長	事務局長

教育費

平成30年度予算(平成23～30年度予算・決算推移)

H30年度予算案作成のポイント	教育費、管理経費とも前年度予算並。 学科予算は前年度学生一人当たり@12,1864円同額を学科の在籍人数で計上。入学予定者数は220名を想定。 学科主催の海外研修費用等は、当該学科で予算化
-----------------	--

(円)																							
		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度			平成27年度			平成28年度			平成29年度			平成30年度			備 考
		予 算	決 算	予算	決算	予算	決算	申請額	調整結果	決算	申請額	調整結果	決算	申請額	調整結果	決算	申請額	調整結果	決算	申請額	調整結果	備考	
																							* 決算記載額は3月時点。最終決算は4月
人間発達学科	教育研究	4,000,000	3,920,342	3,600,000	4,003,340	4,588,000	4,588,000	3,834,000	4,168,000	3,951,409	3,966,000	3,966,000	3,786,764	3,966,000	3,966,000	3,842,444	3,865,000	3,500,000	3,246,570	3,250,000	2,830,000	学生数	後援会から援助
保育士課程		3,235,000	3,231,549	3,000,000	3,000,000	2,700,000	2,700,552	3,760,000	900,000	701,353	389,000	389,000	374,882	624,190	624,190	545,177	480,000	480,000	410,137	776,800	776,800		
初等教育コース課程								272,200	273,000	226,492	490,000	490,000	302,589	508,000									
心理福祉学科 ←総合福祉学科 (国際福祉体験実習費用補助)	教育研究	4,400,000	4,000,786	4,200,000	4,026,380	2,945,000	2,485,095	4,015,000	3,094,000	3,018,868	3,223,000	2,940,000	2,923,338	2,967,000	2,940,000	2,623,029	2,940,000	2,200,000	2,031,478	2,300,000	2,000,000	学生数	後援会から援助
健康栄養学科	教育研究	5,000,000	4,574,775	4,600,000	4,643,621	4,312,000	3,975,929	4,153,000	4,232,000	4,037,405	4,523,000	4,020,000	4,013,048	4,250,000	4,020,000	3,869,505	3,900,000	3,900,000	3,794,041	3,900,000	3,620,000	学生数	後援会から援助
(国試対策費用補助)		2,900,000	2,321,099	2,900,000	1,374,425	1,900,000	1,898,056	2,000,000	2,000,000	2,241,855	2,000,000	2,000,000	1,817,754	2,000,000	2,000,000	1,892,297	1,000,000	1,000,000	1,090,802	2,000,000	2,000,000		
グローバル・スタディーズ学科 →国際教養学科	教育研究	3,400,000	3,368,492	3,100,000	2,392,721	2,879,000	2,867,630	2,900,000	2,493,000	2,493,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,370,000	2,400,000	学生数	後援会から援助
(異文化体験費用補助)		8,000,000	8,000,000	6,000,000	5,565,580	5,500,000	3,155,940	5,200,000	5,200,000	3,386,166	4,940,000	4,940,000	5,247,106	4,940,000	4,940,000	6,736,796	3,140,000	3,140,000	3,560,000	3,160,000	3,160,000		海外研修の助成
秘書課程 →ビジネス実務課程		540,000	540,000	490,000	490,000	460,000	460,000	460,000	437,000	437,000	415,000	415,000	415,000	415,000	394,250	394,250	394,250	374,500	317,949	374,500	374,500		
日本語教員養成課程	教育研究	405,000	250,000	370,000	270,299	220,000	219,529	310,000	209,000	220,333	101,000	101,000	62,356	73,000	73,000	73,458	75,000	70,000	70,000	66,000	66,000		
教職課程→センター	教育研究	1,000,000	662,439	900,000	946,785	855,000	855,000	905,000	813,000	813,000	800,000	500,000	475,148	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	662,000	662,000		
	実習費											241,500	131,510	245,000		245,000							
マルチメディア	教育研究	200,000	277,200	180,000	121,380	170,000	33,236	170,000	162,000	81,138	153,900	153,900	107,631	146,000	146,000	50,729	130,000	130,000	0	120,000	120,000		教務課へ移行
体育・スポーツ	教育研究	100,000	105,000	135,000	135,000	130,000	0	150,000	124,000														教務課包含
カトリック研究所	教育研究	1,750,000	1,749,961	1,500,000	1,500,000	900,000	900,000	900,000	855,000	855,000	1,240,000	812,250	812,250	812,250	812,250	862,000	772,000	862,000	960,000	960,000	960,000		
同 (図書費)	教育研究	900,000	900,000	810,000	810,000	480,000	480,000	480,000	456,000	456,000	540,000	433,200	383,200	370,920	370,920	304,211	370,920	352,500	262,500	321,170	321,170		
情報システム	教育研究	3,470,000	3,454,620	11,000,000	12,013,426	6,811,000	6,385,549	5,280,000	5,280,000	5,293,176	4,950,000	4,950,000	4,938,948	5,800,000	5,800,000	4,324,443	5,910,000	5,500,000	5,499,941	6,366,000	6,000,000		
発達センター	教育研究	2,800,000	2,919,964	2,300,000	2,293,075	2,185,000	2,172,233	1,435,000	1,435,000	1,399,241	2,486,000	2,386,000	2,109,189	2,540,000	2,540,000	2,151,435	2,150,000	2,150,000	1,917,684	2,150,000	2,150,000		
学生相談室	教育研究	180,000	180,125	170,000	190,000	190,000	78,844	130,000	130,000														学修支援センター包含
ハラスメント防止対策委員会	教育研究	128,000	85,680	45,000	0	42,000	38,430	145,000	145,000	103,110	75,000	75,000	75,000	80,000	71,250	70,876	71,250	68,000	80,527	80,000	80,000		
教育・研究委員会	教育研究	3,640,000	3,166,858	2,600,000	2,398,125	3,500,000	2,902,040	3,320,000	3,320,000	2,566,417	4,344,000	4,154,000	4,154,000	3,946,300	3,796,300	3,562,636	3,796,300	3,600,000	2,495,384	2,524,500	2,524,500		
宗教委員会	教育研究	360,000	355,575	330,000	360,000	340,000	339,360	340,000	323,000	285,087	308,000	308,000	185,116	290,000	290,000	179,492	275,000	275,000	78,624	260,000	260,000		
※学生会 課外活動援助費	教育研究	2,070,000	755,824	2,500,000	1,895,388	2,200,000	1,635,967	2,500,000	2,090,000	1,307,840	1,950,000	1,950,000	1895916	1,950,000	1,852,500	967,715	1,855,000	1,760,000	1,132,939	1,760,000	1,760,000		クラブ活動
(合 計)		48,478,000	44,820,289	50,730,000	48,429,545	44,207,000	38,171,390	42,659,200	39,039,000	33,873,890	39,263,900	37,877,850		39,610,660	38,323,660		34,014,720	32,072,000		34,050,970	32,714,970		

初等教育コース課程	実習費							272,200	273,000	226,492	490,000	490,000	302,589	508,000		385,501	436,000		397,962	532,000			学生徴収額
幼児教育実習費	実習費							272,200	273,000	226,492	490,000	490,000	302,589	2,856,000		2,829,018	2,847,000		2,838,176				学生徴収額

教職課程	実習費											241,500	131,510	245,000		245,000	246,000		246,000	365,000			学生徴収額
------	-----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---------	---------	---------	--	---------	---------	--	---------	---------	--	--	-------

志願者及び入学者データ

(2013 年度～2018 年度の推移)

入試広報課

志願者及び入学者データ（2013 年度～2018 年度の推移）

はじめに

このデータは、入試広報課がこれまでに実施してきた入試データを基にして、集計したものである。それぞれの年度で特徴的な取り組みや戦略があるだろうが、ここでは志願者データと入学者データの推移を単純に比較し、2013 年度から 2018 年度に実施した入試結果データだけを取り上げ、入試状況がどのように推移していたかについてまとめることとした。

今回はそれぞれのデータを県別の状況として取り上げ、まとめることで県別の入試状況変化を把握し、2018 年度の結果を分析してみる。

1. 志願者データ

志願者全体の状況を見てみると、2013 年度から 2016 年度まで宮城県内の志願者割合が 66% と高いことがわかる。2017 年度と 2018 年度においては、62% と低く推移していることがわかり、全体志願者数の低下は、2016 年度から顕著になっている。県別でみると宮城県・秋田県・福島県で大きく数を減らしていることがわかる。

この志願者数の低下を見る限り、何らかの要因があったと言えるが、ここでは細かな取組変更などは考えずに、結果の実数を基に見ていくこととする。ただし、2018 年度については、実施してきた活動が明らかなため、実数に表れている取組内容を提示していくこととする。

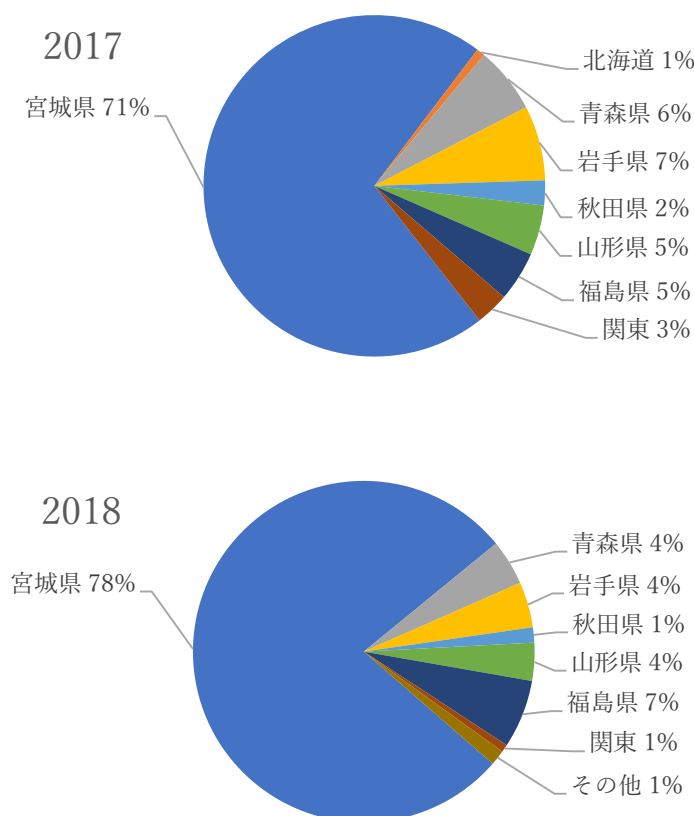
2018 年度の 5 月以降の取組として、①高校訪問の強化、特に宮城県内の訪問回数は 5 回となった。なお、その際に入試広報課員が高校ごとに担当者を固定し、担当者制を実施した。県外においてもなるべく同じ担当者が訪問するようにした。②指定校推薦を積極的に活用するように進めた。③SNS 広報の導入を行い、LINE@をはじめ、Google、Twitter のバナー広告を導入した。LINE@は登録した生徒等へ本学の入試情報とイベント情報を発信するために実施し、Google と Twitter は広く本学を知ってもらうために行った。東北六県プラス新潟で始めたが、途中から北関東の茨城、栃木に地域を広げ実施してきた。その他にも細かな取組は行っているが、大きな点だけ、記述している。

その結果、2018 年度においては、全体数は志願者 59 名増となり、内容は宮城県の志願者が大幅に増え、さらに近県である山形・岩手・福島の志願者が増えていることがわかる。

	志願者数(全体)						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6 年間
宮城県	469	525	490	345	261	294	2384
北海道	4	4	7	4	2	1	22
青森県	22	25	23	21	20	16	127
岩手県	43	36	35	35	30	45	224
秋田県	38	51	41	16	18	14	178
山形県	67	78	54	53	42	56	350
福島県	44	52	52	30	22	36	236
関東	12	15	20	3	15	5	70
新潟県	0	11	5	6	7	4	33
その他	11	9	13	11	1	6	51
合計	710	806	740	524	418	477	3675

1－1．志願者データ（AO入試＋推薦入試）

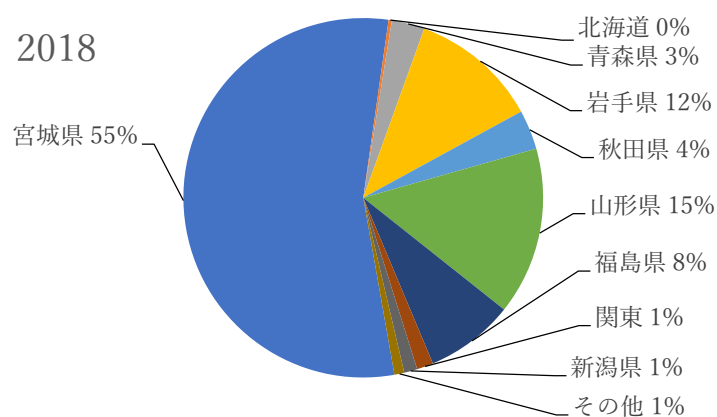
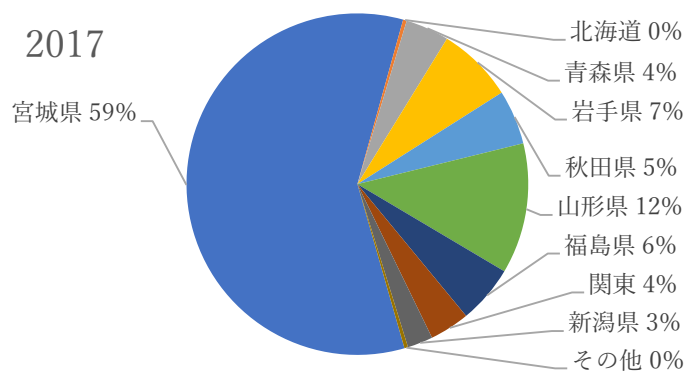
AO 入試と推薦入試については、前半の入試であり、本学を第一希望として入学してくる生徒であることから、重要な入試と言える。AO 入試については、一般入試の括りであるため、選抜であるが、今の本学の現状から言うと選抜しにくい状況である。また、公募推薦も専願であるが、志願者が多い時には選抜を行い、少ない時には緩くなる入試であると言える。そのため、志願者の推移から読み取れるのは、2017 年度から 2018 年度の宮城県内の志願者数を見ると 7%改善していることは、打った戦略が効果に結び付いたと言える。



1－2．志願者データ（一般入試＋センター入試）

一般入試とセンター入試については、実数でみると宮城県内が昨年よりも増えていることもさることながら、山形・岩手・福島が大幅に増加していることがわかる。この要因は、高校訪問以外の要素が大きいと言える。何故なら、前半の入試は高校の進路指導部が強く関わり、生徒を指導するのに対して、後半の入試である一般入試やセンター入試においては、多くの大学に出願し、希望の高い志望校に入学する入試であるため、知名度や広報力が重要になると言える。この件は、最終的には高校訪問も影響してくるが、SNS での広報活動が戦略としてかみ合った結果であろうと考えている。

この一般入試とセンター入試で、昨年度よりも 47 名の志願者増となっていることは、次年度につながる良い結果であると考えている。SNS でのバナー広告は、本学ホームページに誘導しているため、ホームページの充実が喫緊の課題であると言えるが、大学広報室のニュース&トピックスも頻繁に更新されている。本学が活動的に動いているように見えることが良い影響を生んでいると言える。



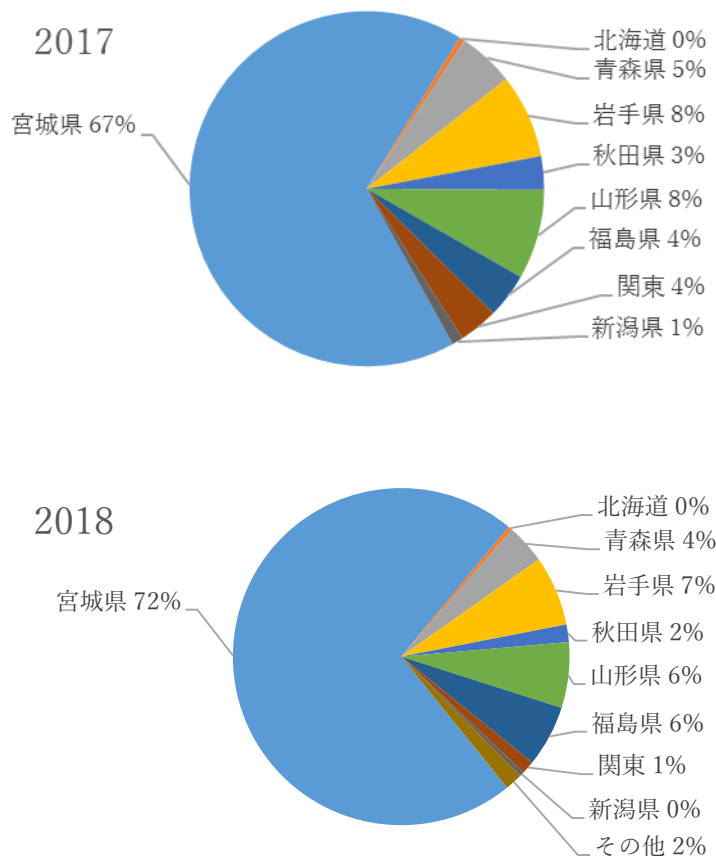
	志願者数：一般＋センター利用						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	334	392	322	232	171	186	1637
北海道	4	3	5	2	1	1	16
青森県	17	16	12	14	12	10	81
岩手県	29	30	27	30	21	39	176
秋田県	31	47	34	12	15	12	151
山形県	58	67	40	45	36	51	297
福島県	40	42	46	21	16	27	192
関東	12	11	17	3	11	5	59
新潟県	0	9	4	6	7	4	30
その他	9	9	11	7	1	3	40
合計	534	626	518	372	291	338	2679

2. 入学者データ

入学者データを見てみると、この数年で入学者が落ちていることがわかる。2015 年度から 2017 年度までに定員（300 名）の 65% まで減っていることから深刻な状況が見て取れる。2018 年度においては、高校訪問の結果、宮城県内の入学者の増加が見て取れる。率で言っても 2017 年度から見ると 5% の増加と大きな成果となっていることがわかる。また、2018 年度の入学者は、

42名の増加となっている。

志願者データのところでも述べたように、入試広報課の取組が成果となって、実を結ぶ結果となったのであろう。しかしながら、すべてにおいて単年度で成果につなげようとしたのではなく、2年目に増加させるために行っているため、これからが本番であると考えている。



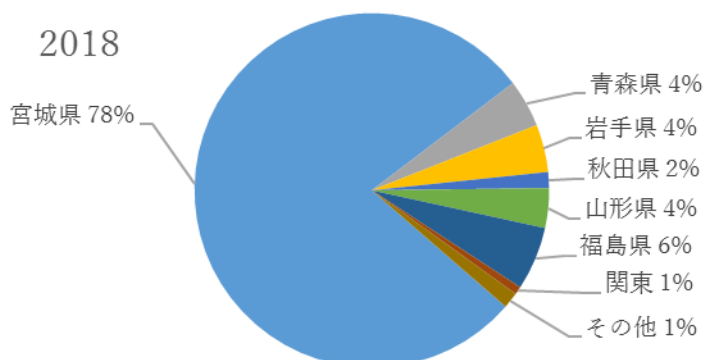
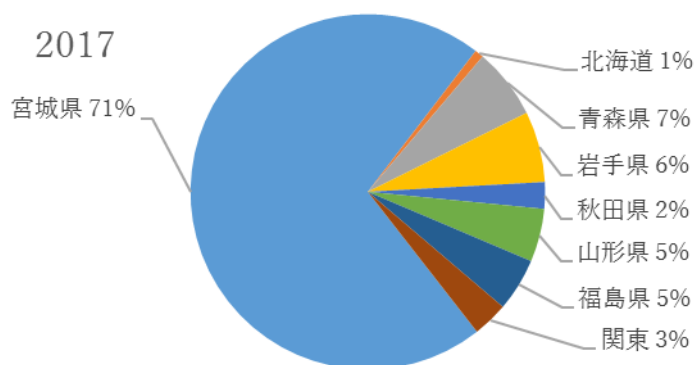
	入学者数(全体)						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	193	201	185	159	131	171	1040
北海道	1	1	2	2	1	1	8
青森県	8	15	10	11	10	9	63
岩手県	21	11	12	9	15	16	84
秋田県	16	11	13	7	6	4	57
山形県	26	22	18	20	16	15	117
福島県	7	15	15	16	8	14	75
関東	0	5	4	0	7	3	19
新潟県	0	4	2	1	2	1	10
その他	5	2	5	4	0	4	20
合計	277	287	266	229	196	238	1493

2-1. 入学者データ（AO入試＋推薦入試）

入学者データのAO入試と推薦入試の状況を見るとわかることは、宮城県内の入学者の増加が

良い結果につながっていることがわかる。2017 年から見ても、2018 年は宮城県が 7%増加していることは、明らかに高校訪問が効いていることは紛れもない事実である。しかしながら、実際にはかなり頑張ったはずなのに実数が 138 名で止まってしまい、思ったほどではなかったのも事実である。

この結果を受けて、一般入試に向けて更なる手を打つことに決めたのも事実である。一般入試に対しては、多くの生徒に向けて、出願書類を送ることが必要であるが、これまで高校宛にしか送付していなかったことがわかったため、業者から依頼される資料請求データ（生徒情報）を基に約 1000 名にダイレクトメールを発送することにした。

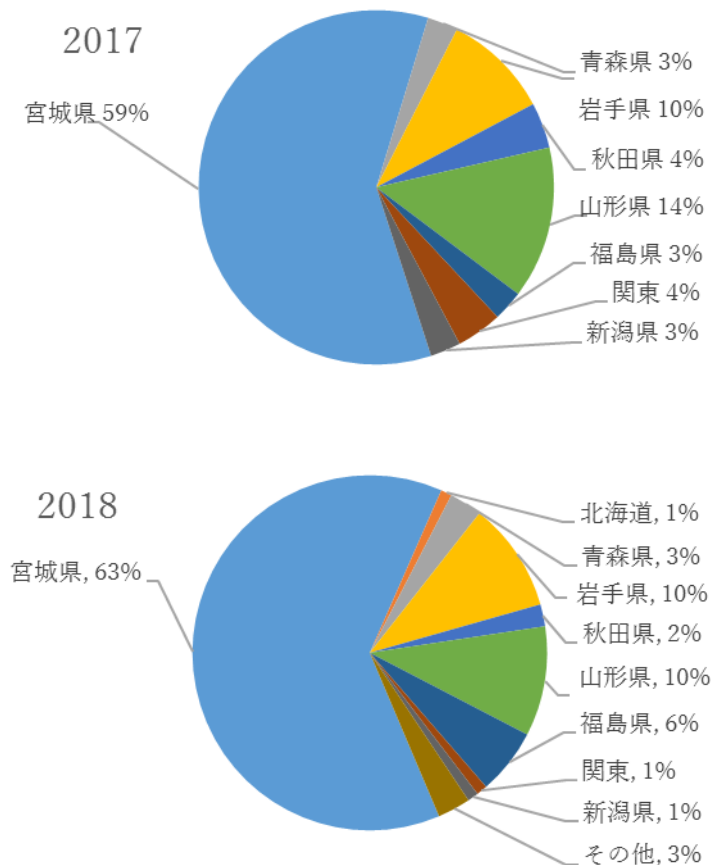


	入学者数:AO+推薦						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	132	126	141	111	88	108	706
北海道	0	1	2	2	1	0	6
青森県	5	9	8	7	8	6	43
岩手県	14	5	6	2	8	6	41
秋田県	6	4	5	4	3	2	24
山形県	9	9	13	7	6	5	49
福島県	4	9	6	9	6	8	42
関東	0	4	2	0	4	1	11
新潟県	0	1	1	0	0	0	2
その他	2	0	2	4	0	2	10
合計	172	168	186	146	124	138	934

2-2. 入学者データ（一般入試+センター入試）

入学者データの中で、一番愕く結果となったのが、この一般入試とセンター入試の結果である。2018年度の入学者が100名となっており、2015年から2017年までは約80名となっているため、前半は思ったほどではなかったが、後半が予想に反して好転したと言える。また、宮城県内の増加が2017年度から見ると4%増、実数では20名増加している。

この結果からわかることは、驚異の歩留りが起きているのだが、この1年間に取組んできた基礎固めである高校訪問と、その他の取組すべてが良い方向に振れたことによって、このような結果につながったと思っている。



	入学者：一般+センター利用						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	61	75	44	48	43	63	334
北海道	1	0	0	0	0	1	2
青森県	3	6	2	4	2	3	20
岩手県	7	6	6	7	7	10	43
秋田県	10	7	8	3	3	2	33
山形県	17	13	5	13	10	10	68
福島県	3	6	9	7	2	6	33
関東	0	1	2	0	3	1	7
新潟県	0	3	1	1	2	1	8
その他	3	2	3	0	0	3	11
合計	105	119	80	83	72	100	559

3. 考察

志願者データ、入学者データ、それぞれに特徴的な結果が率的にも実数的にも現れているのであるが、その結果からわかることは、きちんと取組むことで成果につながるということが実証されている。今回の結果は、入学定員（300名）の約80%に到達したことで、今後さらに入学者を増やしていける可能性を示せたと思っている。

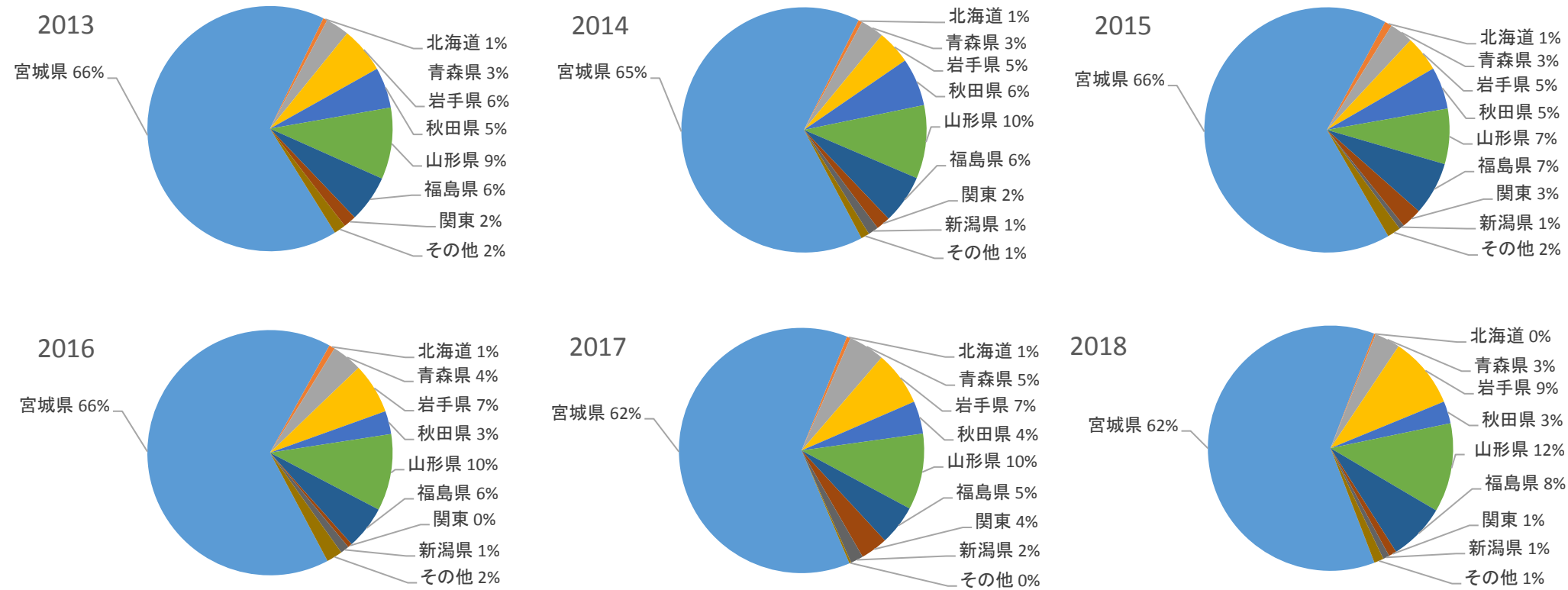
なお、次年度の取組として、今年以上に良くするために、入試制度の見直し、入試時期や出願期間、手続期間の変更などを実施する。大学案内の大幅リニューアルも実施し、資料請求データの一元管理も行う。資料請求データの一本化や進学相談会の参加数の増加、計画的な高校訪問など、多数検討している。これをやればよくなるとは言えないが、費用対効果を意識し、効果のありそうなことはやっていく方向で考えている。

最後に

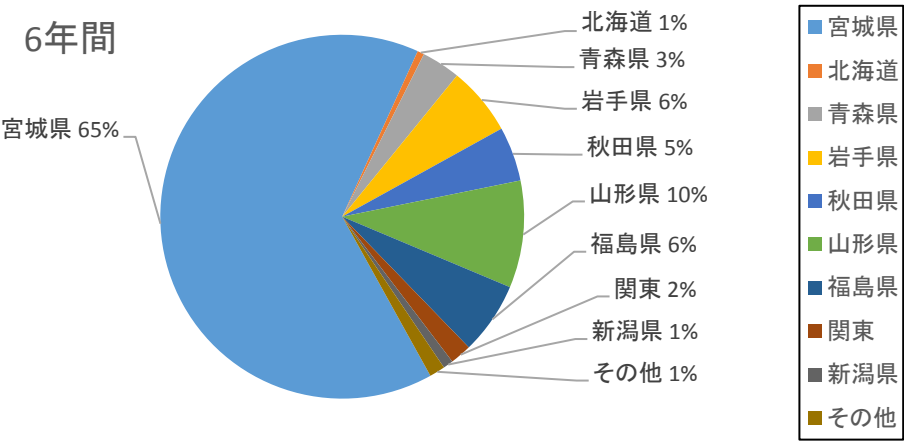
この状況を検証するには、2019年度の結果を見ることがわかりやすいと思う。また、高校別累積データの情報記載も依頼されていたが、結果的には仙台白百合学園が一番多く、その他の高校については、年度ごとにばらつきがあるため、何に利用するかで見ようによっては、ちょっとわかりづらいかもしれない。一応拾い出すとこのような結果となっている。志願者累積では、①仙台白百合学園、②古川黎明、③多賀城、④富谷、⑤泉、⑥聖ウルスラ学院英智、⑦仙台三桜、⑧聖ドミニコ学院、⑨仙台東、⑩泉松陵などになっている。ちなみに入学者累積では、①仙台白百合学園、②聖ウルスラ学院英智、③宮城広瀬、④聖ドミニコ学院、⑤古川黎明、⑥塩釜、⑦富谷、⑧常盤木学園、⑨泉松陵、⑩仙台育英学園などになる

志願者データと入学者データの状況からわかることには、大学の取組がきちんと高校に伝われば、または生徒に伝われば、本学に興味を持ち、出願につながるのだと言える。しかしながら、大学が何もしなければ、何も伝わらないということは明らかである。

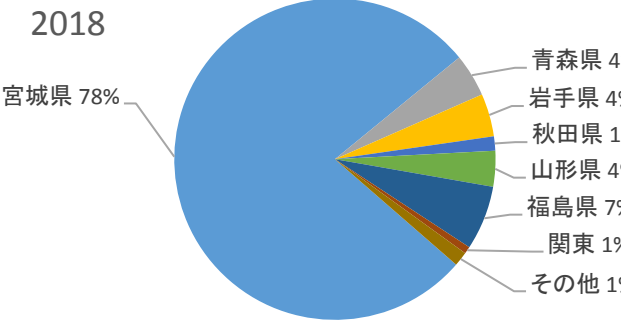
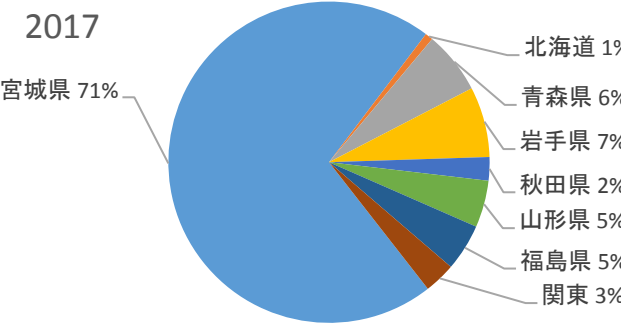
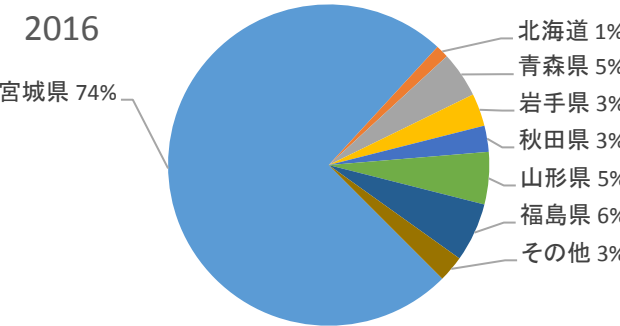
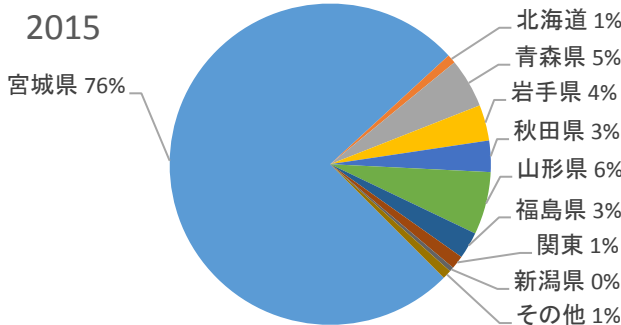
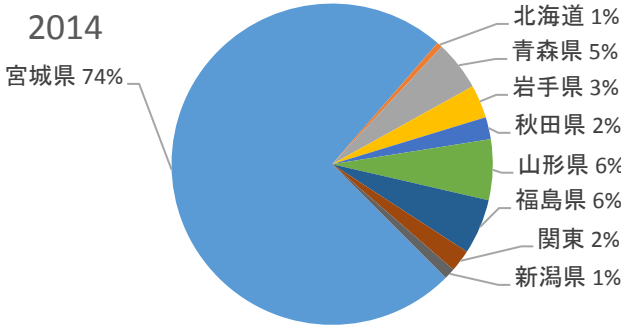
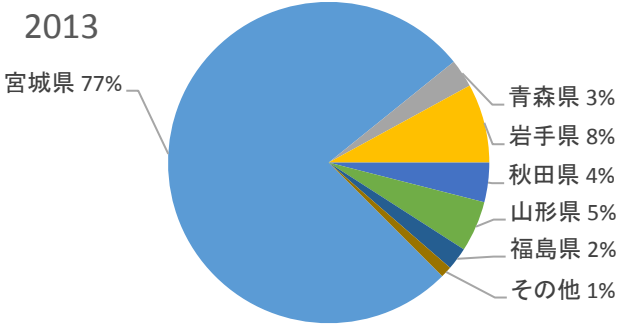
2013～2018年度 県別『志願者』内訳の状況



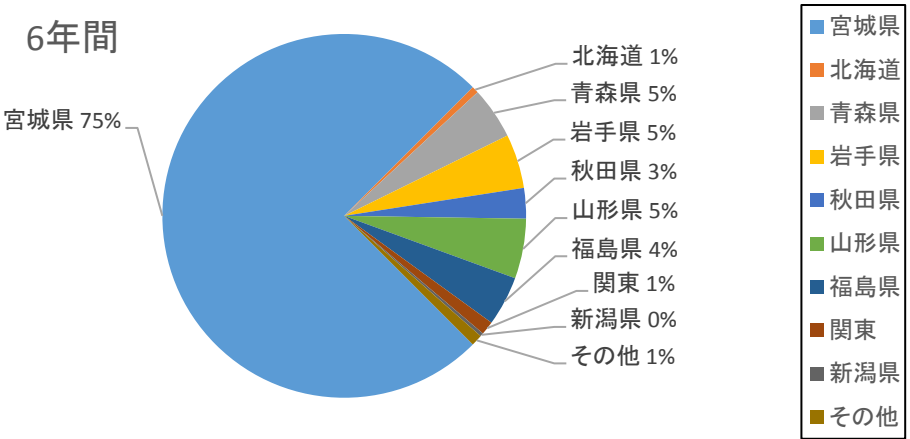
	志願者数(全体)						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	469	525	490	345	261	294	2384
北海道	4	4	7	4	2	1	22
青森県	22	25	23	21	20	16	127
岩手県	43	36	35	35	30	45	224
秋田県	38	51	41	16	18	14	178
山形県	67	78	54	53	42	56	350
福島県	44	52	52	30	22	36	236
関東	12	15	20	3	15	5	70
新潟県	0	11	5	6	7	4	33
その他	11	9	13	11	1	6	51
合計	710	806	740	524	418	477	3675



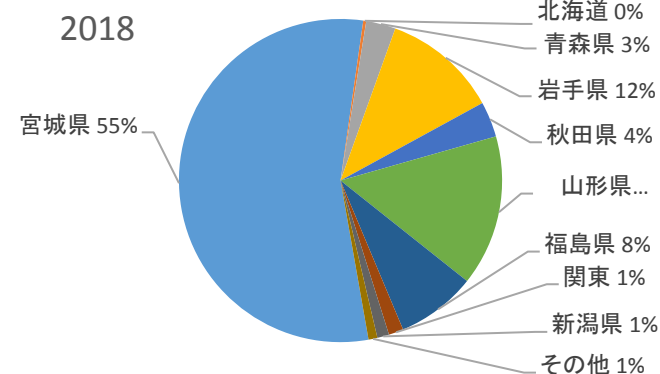
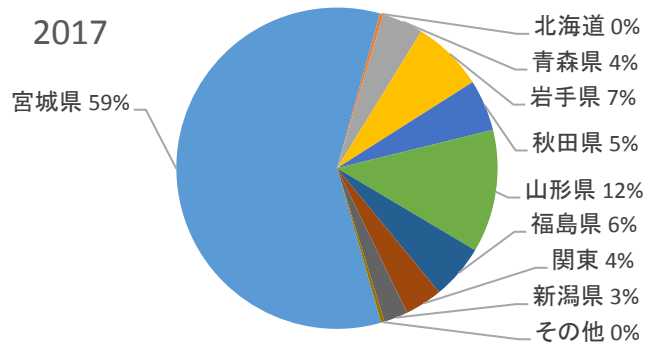
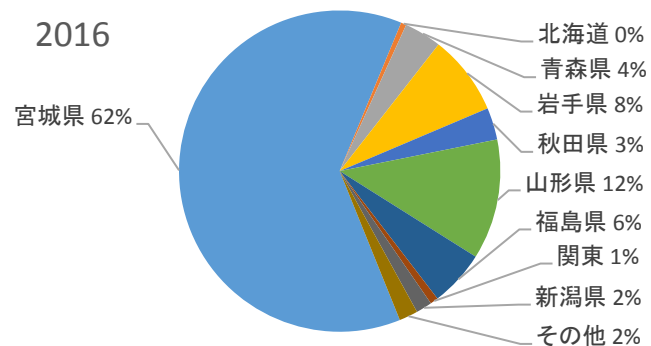
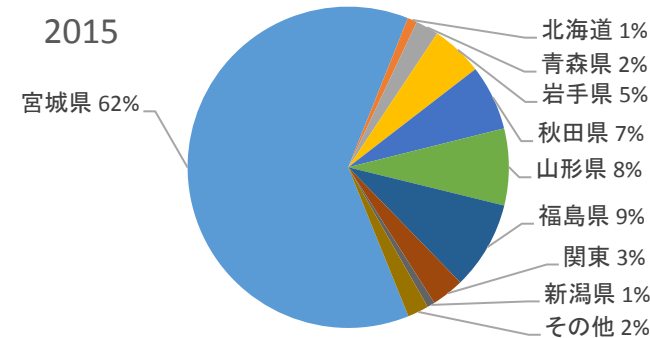
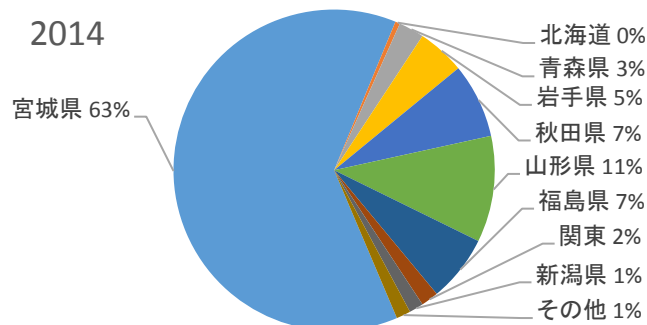
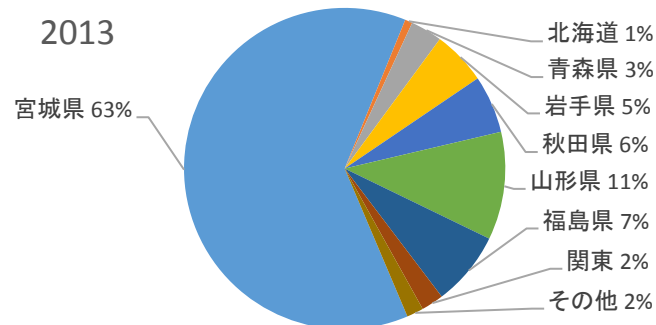
2013～2018年度 県別『志願者』内訳の状況:AO+推薦



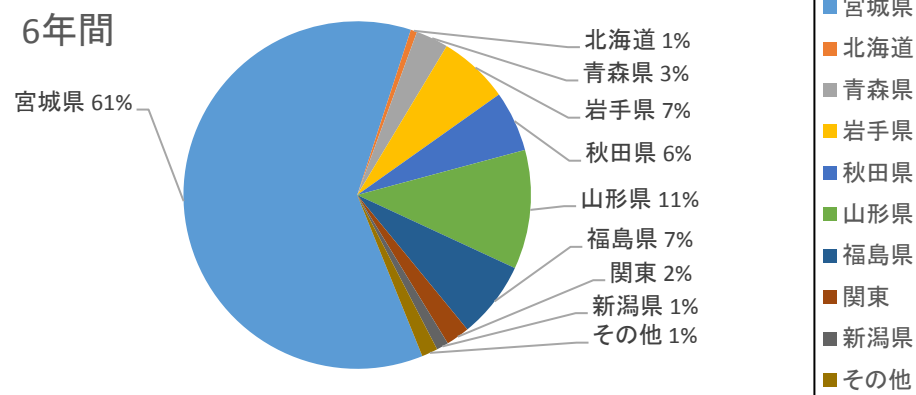
	志願者数:AO+推薦						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	135	133	168	113	90	108	747
北海道	0	1	2	2	1	0	6
青森県	5	9	11	7	8	6	46
岩手県	14	6	8	5	9	6	48
秋田県	7	4	7	4	3	2	27
山形県	9	11	14	8	6	5	53
福島県	4	10	6	9	6	9	44
関東	0	4	3	0	4	1	12
新潟県	0	2	1	0	0	0	3
その他	2	0	2	4	0	2	10
合計	176	180	222	152	127	139	996



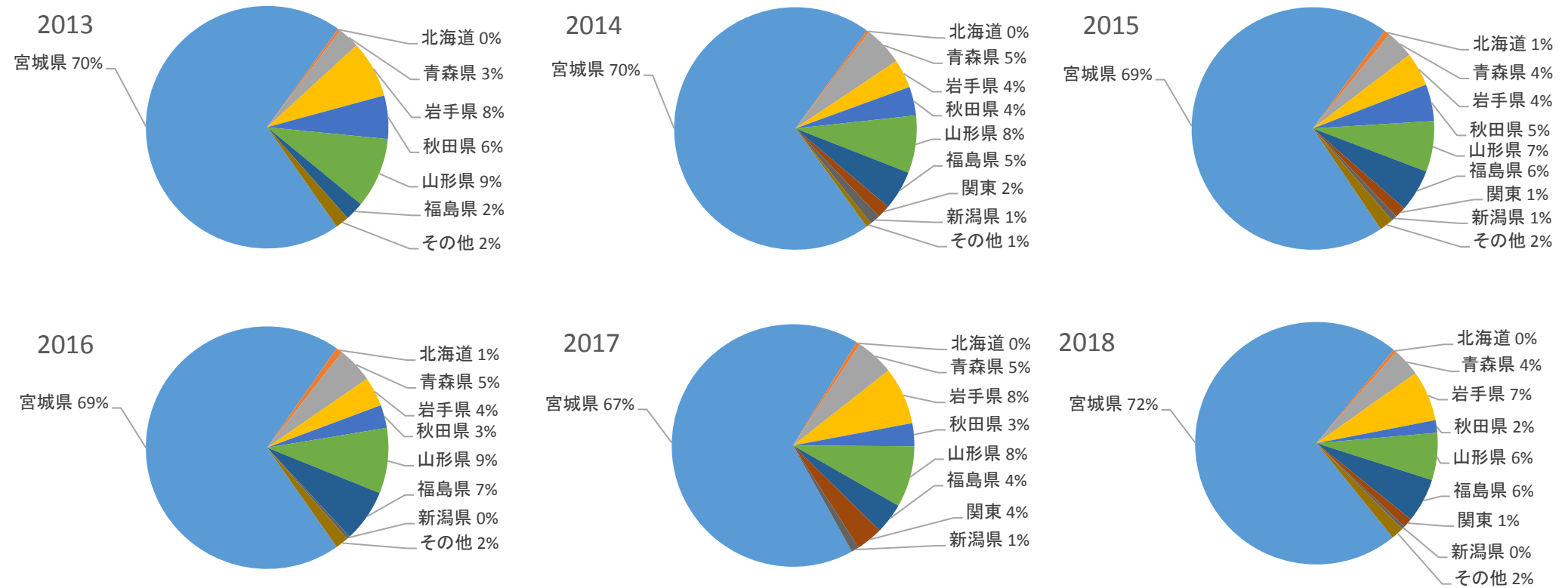
2013～2018年度 県別『志願者』内訳の状況：一般+センター利用



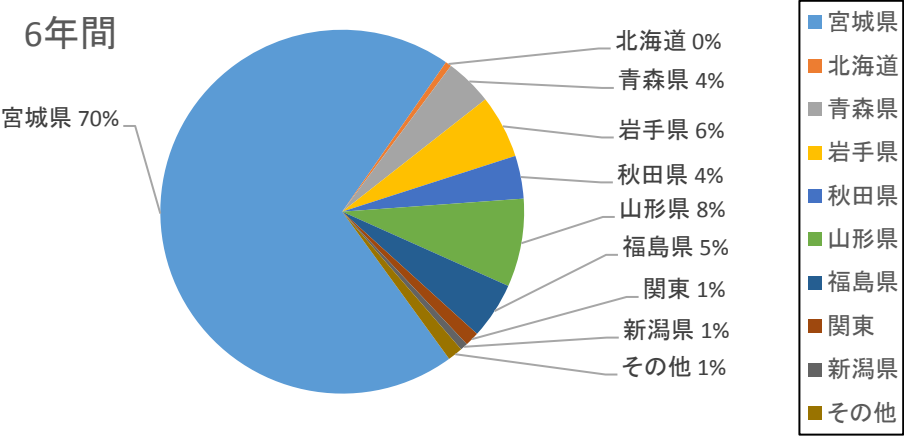
	志願者数：一般+センター利用						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	334	392	322	232	171	186	1637
北海道	4	3	5	2	1	1	16
青森県	17	16	12	14	12	10	81
岩手県	29	30	27	30	21	39	176
秋田県	31	47	34	12	15	12	151
山形県	58	67	40	45	36	51	297
福島県	40	42	46	21	16	27	192
関東	12	11	17	3	11	5	59
新潟県	0	9	4	6	7	4	30
その他	9	9	11	7	1	3	40
合計	534	626	518	372	291	338	2679



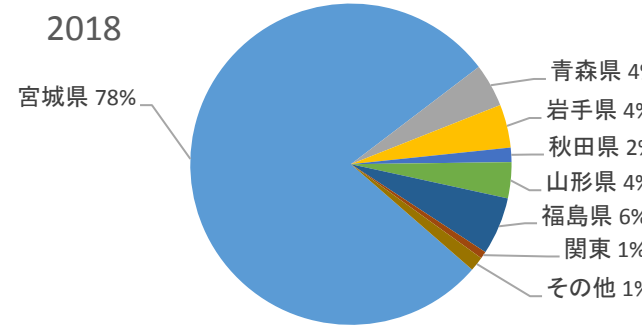
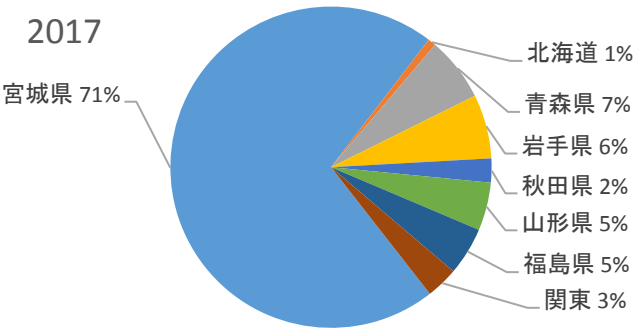
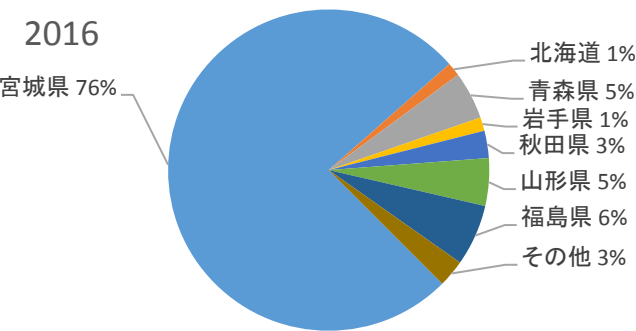
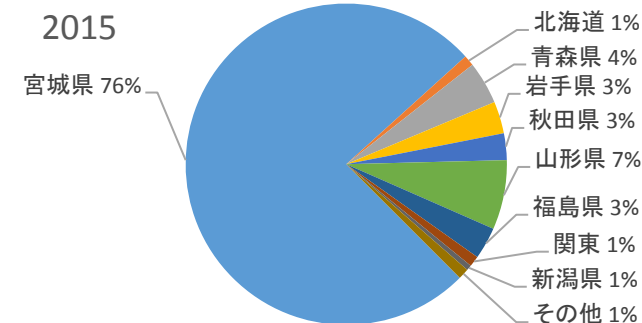
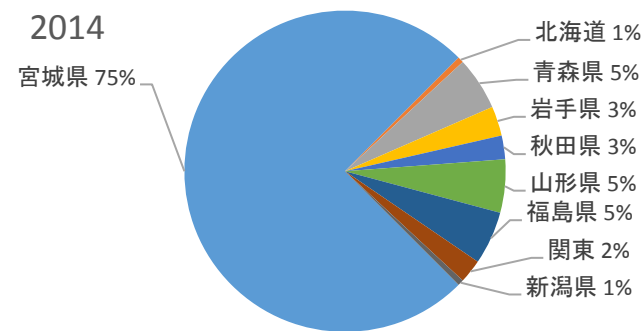
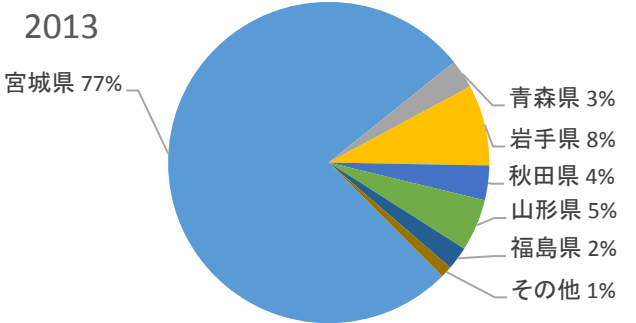
2013～2018年度 県別『入学者』内訳の状況



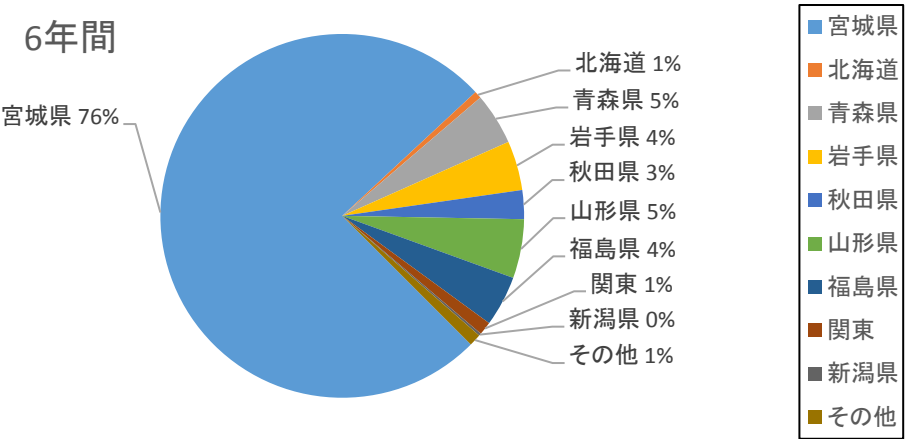
	入学者数(全体)						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	193	201	185	159	131	171	1040
北海道	1	1	2	2	1	1	8
青森県	8	15	10	11	10	9	63
岩手県	21	11	12	9	15	16	84
秋田県	16	11	13	7	6	4	57
山形県	26	22	18	20	16	15	117
福島県	7	15	15	16	8	14	75
関東	0	5	4	0	7	3	19
新潟県	0	4	2	1	2	1	10
その他	5	2	5	4	0	4	20
合計	277	287	266	229	196	238	1493



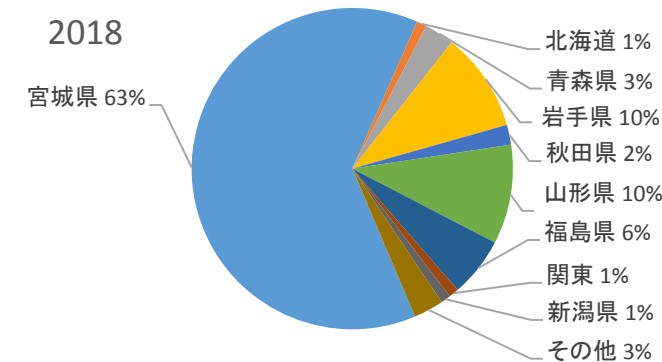
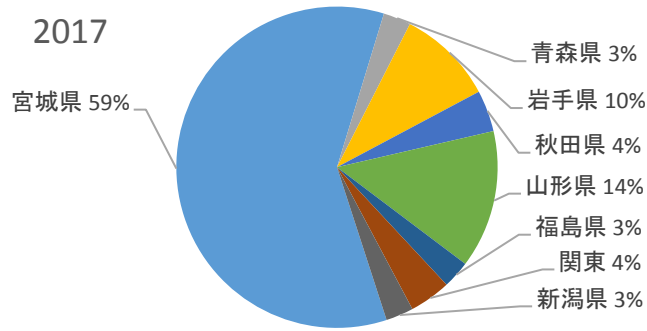
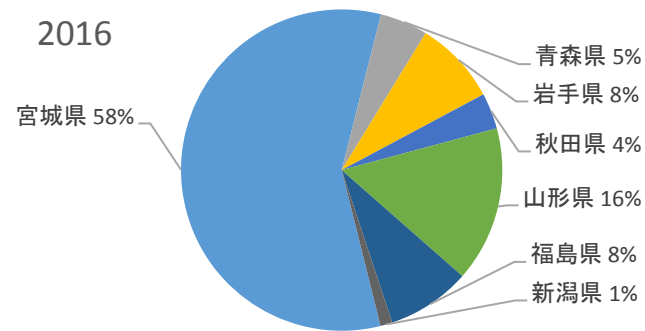
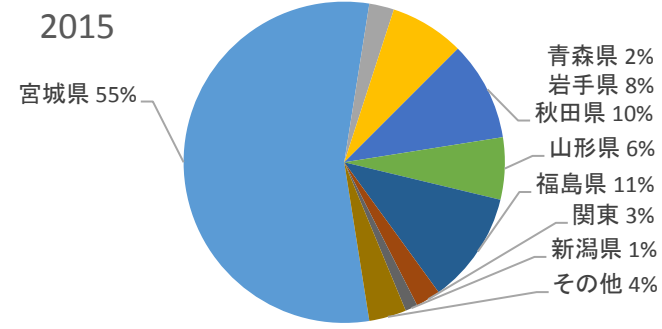
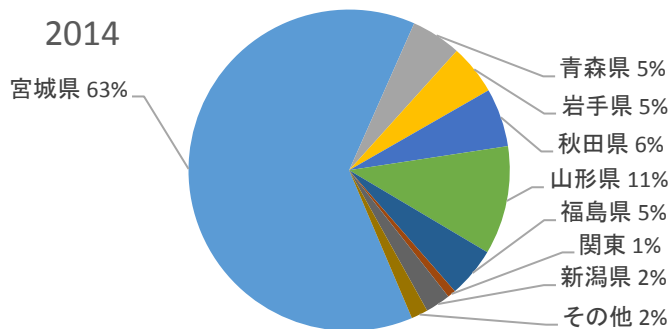
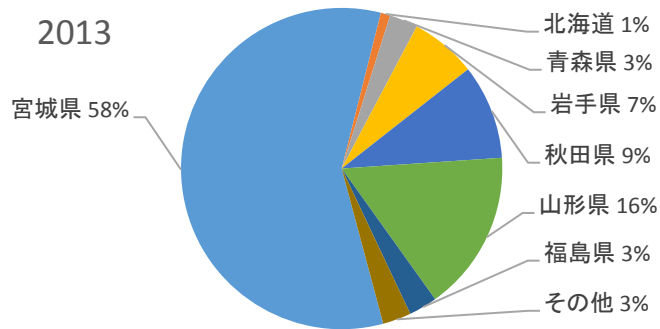
2013～2018年度 県別『入学者』内訳の状況:AO+推薦



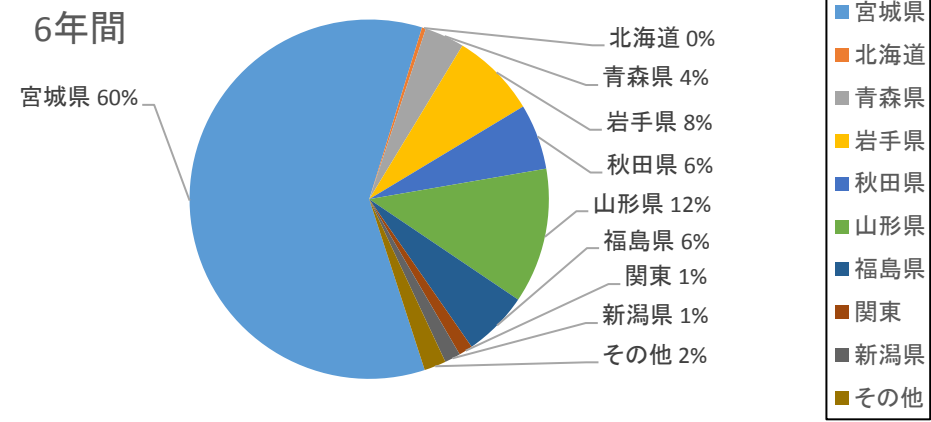
	入学者数:AO+推薦						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	132	126	141	111	88	108	706
北海道	0	1	2	2	1	0	6
青森県	5	9	8	7	8	6	43
岩手県	14	5	6	2	8	6	41
秋田県	6	4	5	4	3	2	24
山形県	9	9	13	7	6	5	49
福島県	4	9	6	9	6	8	42
関東	0	4	2	0	4	1	11
新潟県	0	1	1	0	0	0	2
その他	2	0	2	4	0	2	10
合計	172	168	186	146	124	138	934



2013～2018年度 県別『入学者』内訳の状況：一般+センター利用



	入学者：一般+センター利用						
	2013	2014	2015	2016	2017	2018	6年間
宮城県	61	75	44	48	43	63	334
北海道	1	0	0	0	0	1	2
青森県	3	6	2	4	2	3	20
岩手県	7	6	6	7	7	10	43
秋田県	10	7	8	3	3	2	33
山形県	17	13	5	13	10	10	68
福島県	3	6	9	7	2	6	33
関東	0	1	2	0	3	1	7
新潟県	0	3	1	1	2	1	8
その他	3	2	3	0	0	3	11
合計	105	119	80	83	72	100	559



退学者調査

教務課

はじめに

本調査は、2015 年度に組織化された IR 推進委員会の活動として、2016 年度教育・研究推進委員会の退学者調査を引き継ぐ形で行われた。年々増加傾向にある中途退学者の現状を把握し、その原因を分析、対策を講じることにより、中途退学者の傾向や対策に繋がるための基礎資料として用いられることが期待される。

1. 調査対象及び概要

調査の対象は、2016 年後期から 2017 年前期の中途退学者で、中途退学者の対応や経緯を含む、より詳細な 10 項目（退学年度、退学学年、学籍番号、退学理由、退学願受理日、退学期日、学長許可日、アドバイザー、修得単位数、修得単位数と科目数及び評価内訳）を各学科長に依頼した。これらの情報を元に、単純集計にて分析を行う。

2. 調査の集計

2-1 退学者数

調査期間に該当する中途退学者数は 18 名で、内訳は表 1 である。

表 1

	1 年	2 年	3 年	4 年	合計
人間発達学科		1	1		2
心理福祉学科	1	1	2	2	6
健康栄養学科	4	1		1	6
グローバル・スタディーズ学科	3	1			4
合計	8	4	3	3	18

図 1 は学科別の中途退学者数である。心理福祉学科及び健康栄養学科が各 6 名（33.3%）と最も多く、次いでグローバル・スタディーズ学科 4 名（22.2%）、人間発達学科 2 名（11.1%）となる。

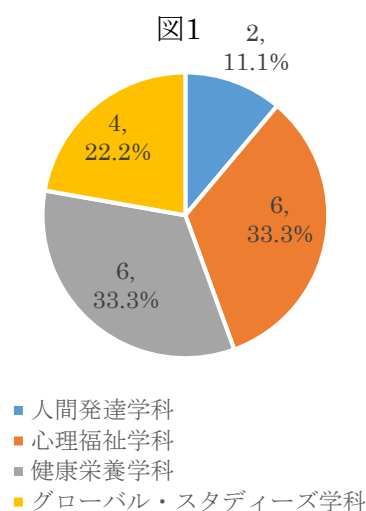
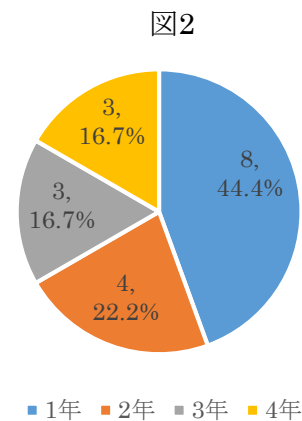


図 2 は学年別の中途退学者数である。1 年生が 8 名 (44.4%) と最も多く、次いで 2 年生 4 名 (22.2%)、3 年生及び 4 年生が各 3 名 (16.7%) となる。



2-2 退学時期

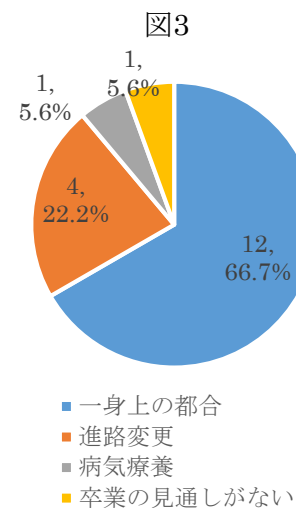
表 2 は、調査期間に該当する 18 名の中途退学者が、いつの時点で退学願書を提出したのかを学科別に纏めたものである。心理福祉学科及びグローバル・スタディーズ学科が前期末に 7 名 (39%)、健康栄養学科が年度末に 4 名 (22%) となり、共に半期終了一ヶ月前に 11 名 (61%) と集中している。

表 2

	2017/2	2017/3	2017/4	2017/7	2017/8	2017/9
人間発達学科		1		1		
心理福祉学科	1		1	1	3	
健康栄養学科	3	2				1
グローバル・スタディーズ学科					4	
合計	4	3	1	2	7	1

2-3 退学理由（退学願書）

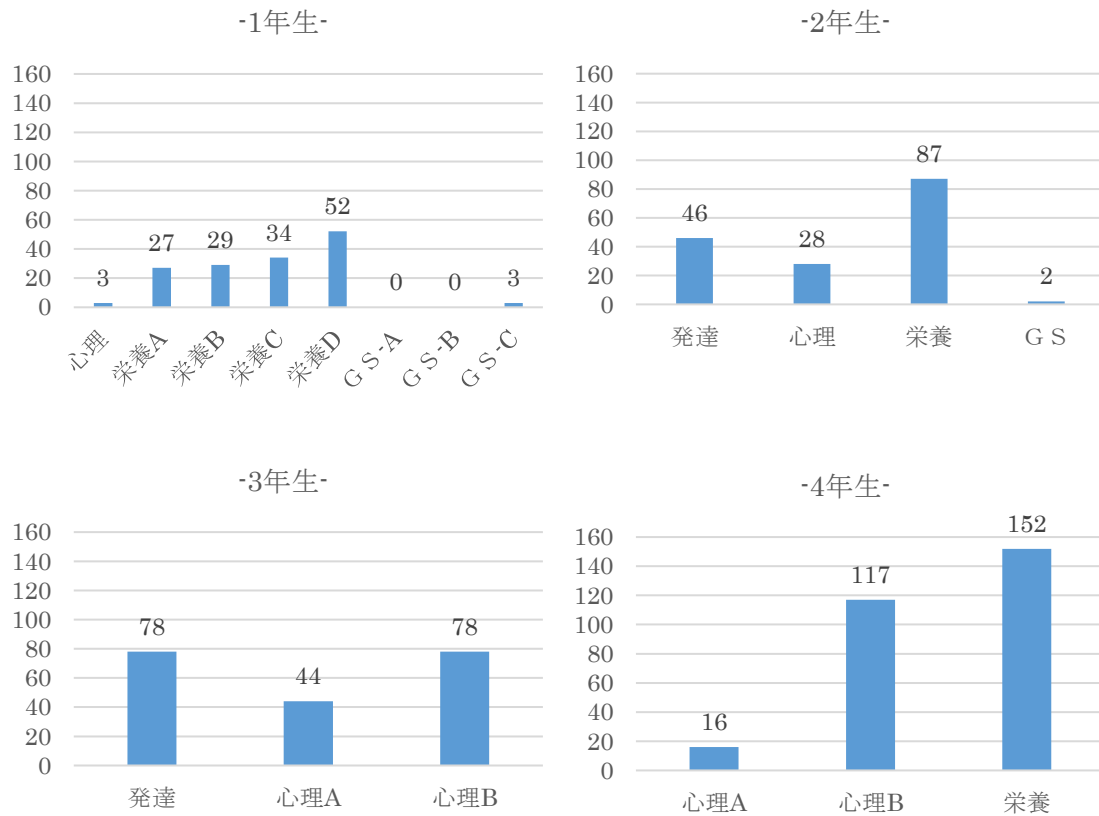
図 3 は、学生から提出された退学願書に記載されている退学理由である。一身上の都合が 12 名 (66.7%) と最も多く、次いで進路変更が 4 名 (22.2%)、病気療養及び卒業の見通しが無いが各 1 名 (5.6%) となる。



2-4 取得単位数

図4は、中途退学者18名の学年別修得単位数である。退学月による修得単位数の増減はあるが、健康栄養学科の中途退学者は比較的修得単位数が多く、グローバル・スタディーズ学科の中途退学者は修得単位数が少ない傾向にある。

図4



2-5 成績評価

図5から図8は、中途退学者18名の学科別成績評価である。

図5は人間発達学科の中途退学者2名の成績評価である。2年生退学者はC評価が最も多いが、3年生退学者はA評価が最も多い。

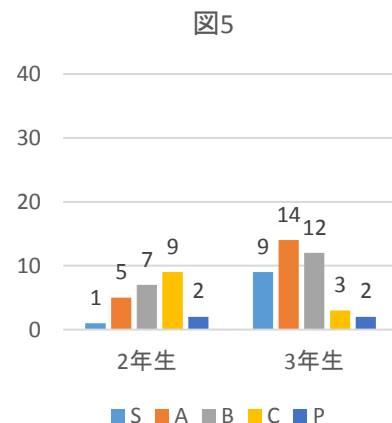


図 6 は心理福祉学科の中途退学者 6 名の成績評価である。2 年生から 4 年生の退学者 5 人中 4 名は、C 評価が最も多い。

図6

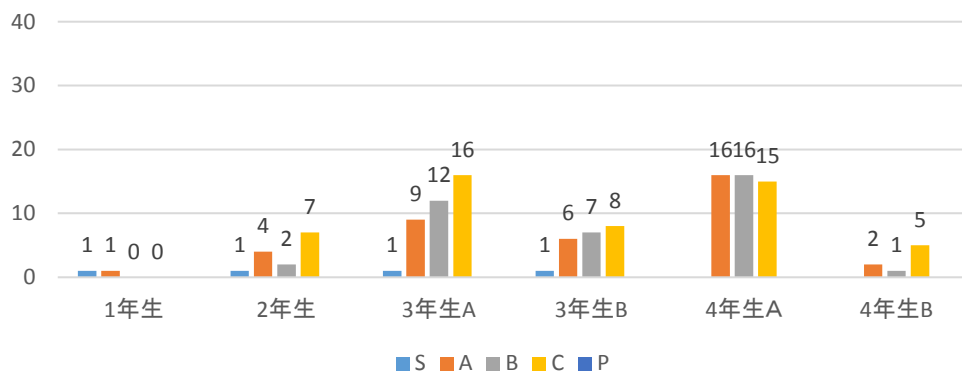


図 7 は健康栄養学科の中途退学者 6 名の成績評価である。1 年生の退学者は S 若しくは A 評価が比較的多く、2 年生や 4 年生の退学者は C 評価が多い傾向にある。

図7

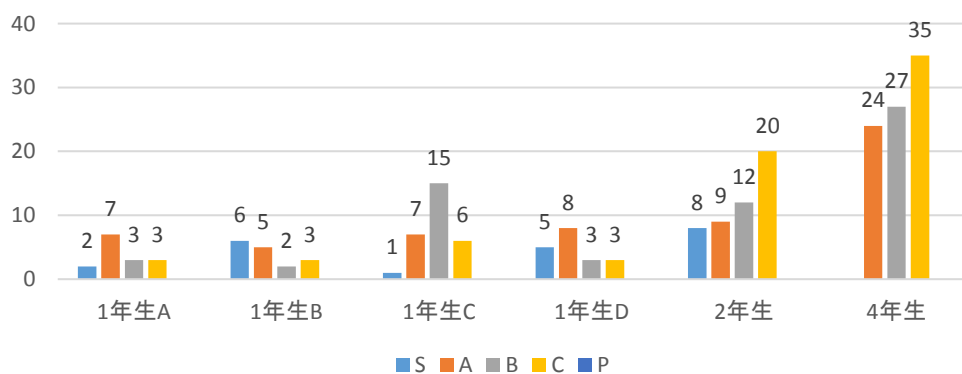
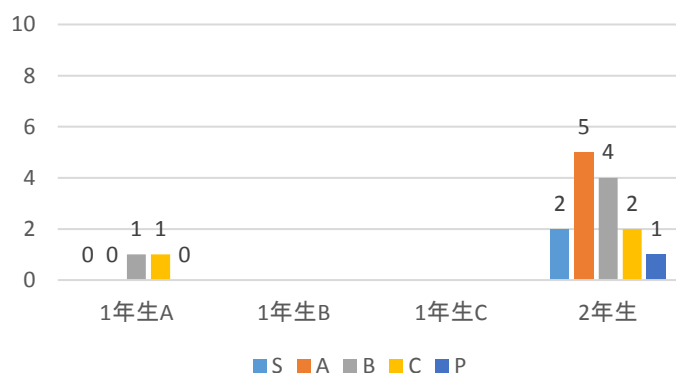


図 8 はグローバル・スタディーズ学科の中途退学者 4 名の成績評価である。2 年生の退学者は A 評価が最も多い。

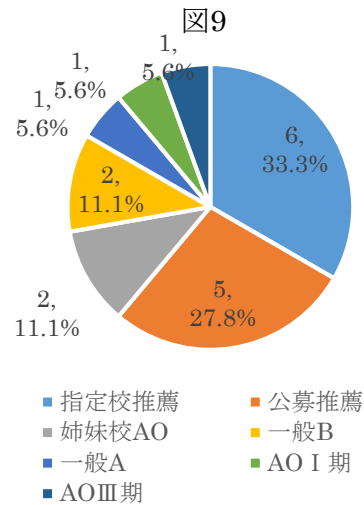
図8



2-6 入試区分

図9は、中途退学者18名の入試区分である。指定校推薦で入学した退学者が6名（33.3%）と最も多く、次いで公募推薦が5名（27.8%）、指定校推薦及び一般Bが各2名（11.1%）と続く。

特徴的なのは、中途退学者18名中、13名（72.2%）が推薦入試で入学した学生である。



2-7 出身高校

表3は、中途退学者18名の出身高校である。公立高校出身者は10名（56%）、私立高校出身者は8名（44%）である。県内高校出身者は13名（72%）、県外高校出身者は5名（28%）である。尚、姉妹校出身の退学者は2名（11%）と唯一の複数校であった。

表3

指定校推薦	富谷、宮城広瀬、工業、明成、聖和、盛岡中央
姉妹校AO	仙台白百合学園 (2)
AO	塩釜、青森明の星
一般	泉館山、一関第二、東京純心女子
公募推薦	富谷、利府、松島、仙台育英学園、盛岡北

3. 考察

各学科長に作成を依頼した、中途退学者の対応や経緯の取り纏めについて、中途退学者18名中提出されたのは、人間発達学科2名中2名分、心理福祉学科6名中4名分、健康栄養学科6名中6名分、グローバル・スタディーズ学科4名中4名分で、18名中16名分である。

その結果を取り纏めたのが表4である。学科より提出されたアドバイザーの報告に基づき、対象となる16名の退学理由は、「進路変更」が6名（37.5%）と最も多く、次いで「学習意欲の欠如・低下」が3名（18.5%）、「人間関係」と「家庭問題」とが各2名（12.5%）となる。

各々の退学理由を細かく見ていくと、「進路変更」については、資格の勉強が想像していたものと違う、資格取得のための基礎科目を高校時にまったく履修していなかったことから、授業についていけないという理由が挙げられた。「学習意欲の欠如・低下」については、入学前から別の進路希望が内在している理由が挙げられた。「人間関係」については、入学後からクラス内での人間関係が上手くいかない理由が挙げられた。「家庭問題」については、経済的理由と親子関係が理由に挙げられた。

退学理由の項目ごとに記載したが、退学理由を 1 つに特定するのは困難で、多様の理由が複合的に絡んでいる状況にある。

表 4

退学理由	退学者数	備考
進路変更	6	
学習意欲の欠如・低下	3	
人間関係	2	クラス内 2 名
家庭問題	2	経済的理由 1 名、親子関係 1 名
体調不良	1	精神的不調 1 名
その他	2	出産 1 名、死亡 1 名

上記のデータを踏まえ、退学者抑制の検討課題を挙げる。

(1) 学生の状況把握と早期支援の徹底

退学者抑制のために重要なことは、退学理由になるような個々の要因の早期発見と、その適切な支援であると思われる。欠席の増加や成績の低下など、目に見える形で兆候が出る場合もあれば、精神的不調や家庭問題など複雑な要因を抱えている場合もある。

その状況を学科アドバイザーが中心となって早期に把握するとともに、関係部署と連携し、適切に支援していく必要がある。そのためには、学科教員と学生間のコミュニケーションが上手くはかれること、学生に関する情報が学科の中で共有されることが重要である。

いずれにしても共通して言えるのは、退学者の兆候は欠席の増加であることから、早期把握する手立てとして、学務システムを利用した「出欠簿」で定期的にもリストアップし、リアルタイムな情報を共有することが重要である。

(2) 学びの進度、理解度チェックの充実

在仙大学の教務部門でも話題になっているが、入学者確保に苦勞する現状において、学力レベルの低下に悩む大学が多い傾向にある。本学も同様に、学生が学びの進度についていけない、あるいは学びの理解度に差が出るなどのケースが見受けられる。今回の退学理由で一番多かった理由に、「授業についていけない」ということであつた。このことから、学びの進度や学生の理解度をチェックする体制が必要である。

(3) 入学前教育の充実

中途退学者が多い傾向の本学現状において、学科の学びに順応できない、或いは、学ぶ過程で方向性の違いに気付くケースが目立っている。また、今回の調査でも、推薦・AO 入試で入学した学生に退学者が多く含まれており、大学の学びをスタートする際の準備がしっかりとできているかどうか重要な問題ではないかと思われる。

本学においても、推薦・AO 入試の入学予定者を対象として、各学科で課題の取り組みを実施しているが、学びを順調にスタートさせるための効果的な取り組みとなっているかどうか学科での再確認が必要である。

(4) その他

学習面を中心に分析を行ったが、それ以外にも、メンタル面や経済面で問題を抱え、退学に至るケースも見受けられる。これらのケースは本学の退学事例を見ても、家庭問題や人間関係、本人の体調や精神面など複雑な問題が絡むため、学科だけでは退学者抑制に繋げることは難しい。

おわりに

中途退学者の要因を早期に把握し、学科やアドバイザー、関係部署が連携しサポートする等、大学全体でのサポートが重要と思われる。退学に至るまでの経緯は、千差万別かつ複雑な要因が絡んでいるが、教職員が個々のケースから学び、中途退学者の抑制に努めなければならない。

今後の抑制体制と、対応策の構築が急務である。

奨学金調査

学生課

はじめに

平成 26 年度にまとめた「奨学金受領学生の状況把握」に引き続き平成 28 年度の日本学生支援機構の貸与状況をまとめることで、学生の生活状況の把握につなげ今後の学生指導の役立てたいと考える。

1. 調査の対象

2018（平成 28）年 3 月の時点の 1～4 年生で日本学生支援機構を貸与している学生を対象に、学生課にて集計を行った。

集計方法は、日本学生支援機構については、高校からの予約学生を含むが、貸与総額は大学入学後に貸与される金額とした。また、その他の奨学金は、貸与奨学金を対象とするが、給付奨学金は含まないこととした。

尚、集計人数は、1 種及び 2 種の併用貸与者を含むため、延べ人数となる。

2. 状況把握について

(1) 日本学生支援機構奨学金貸与者数（資料 1, 2）

平成 28 年度の資料によると 1～4 年生の日本学生支援機構の貸与者合計は、536 名となり学年別の平均人数は 134 名となる。また、在学者 1008 名の全体 53.2% となっている。

図 1 は学年別貸与者の割合であり、4 年生 125 名（23.3%）、3 年生 140 名（26.1%）、2 年生 141（26.3%）、1 年生 130 名（24.3%）となっている。貸与者の割合は 2 年生が一番高い割合となっている。

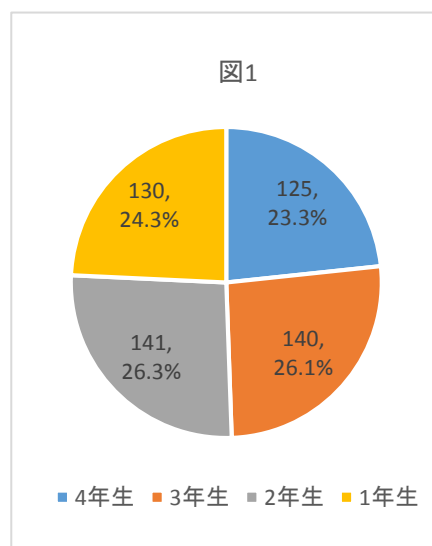
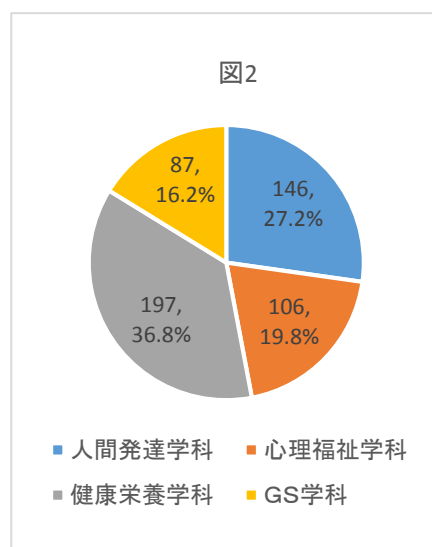


図2は学科別貸与者の割合であり、人間発達学科 146 名（27.2%）、心理福祉学科 106 名（19.8%）、健康栄養学科 197 名（36.8%）、グローバル・スタディーズ学科 87 名（16.2%）となっており、奨学金貸与者のうち約 4 割弱が健康栄養学科となる。



(2) 奨学金高額返済見込み学生数（高額貸与）と返済額（480 万円以上）（資料 2）

図 3 は平成 28 年度の高額貸与者の割合である。

日本学生支援機構とその他の貸与奨学金を併用している学生が対象で、4 年間の合計が 480 万円以上の高額返済見込み者の総数は 126 名となり、奨学金貸与者全体の 23.5%が高額の奨学金を借りている。

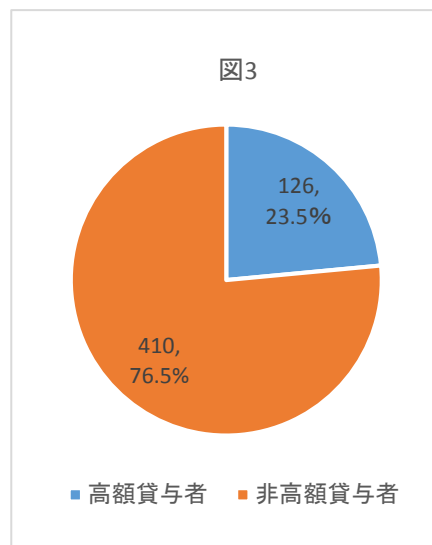


図 4 は高額貸与者（126 名）の学科別割合である。人間発達学科 27 名（21.4%）、心理福祉学科 31 名（24.6%）、健康栄養学科 40 名（31.7%）、グローバル・スタディーズ学科 28 名（22.2%）となり、健康栄養学科の学生が高い傾向にある。

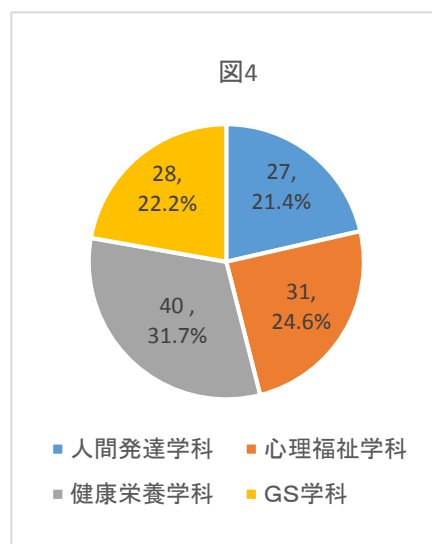
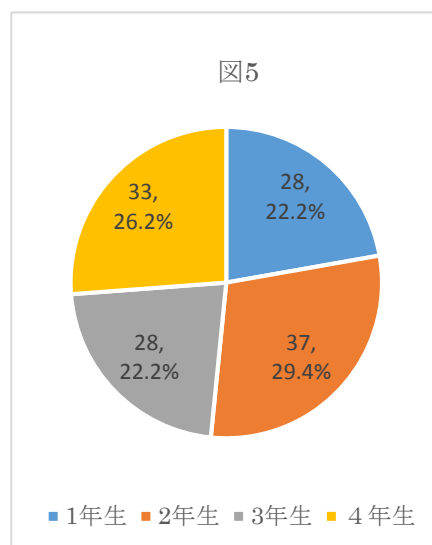


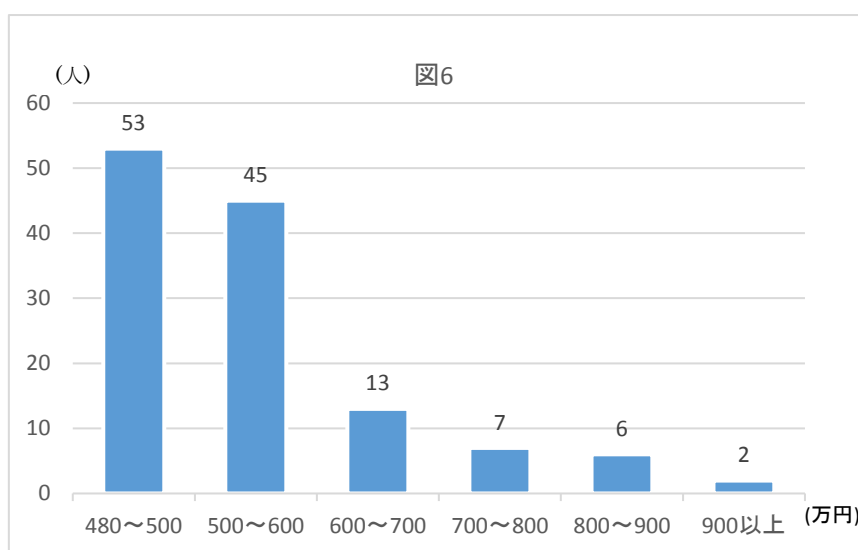
図 5 は高額貸与者の学年別割合である。1 年生 28 名（22.2%）、2 年生 37 名（29.4%）、3 年生 28 名（22.2%）、4 年生 33 名（26.2%）となる。高額貸与予定者の学年平均は約 31 名となるが、2 年生が 37 名、4 年生が 33 名と平均を超えている。



(3) 高額貸与予定者の総額別人数（資料 3）

900 万円以上の高額貸与予定者は、健康栄養学科 1 年及び心理福祉学科 3 年に各 1 名、合計 2 名が在籍しており、日本学生支援機構の一種と二種、その他の貸与奨学金を併用している。

図 6 は総額別金額の人数である。最も多い人数は、480～500 万円未満の 53 名（42.4%）となっており、全体の半数近い数字になっている。次いで 500～600 万円未満で 45 名（36.0%）、600～700 万円未満で 13 名（10.4%）、700～800 万円未満が 7 名（5.6%）、800～900 万円未満が 6 名（4.8%）、900 万円以上が 2 名（1.6%）となる。



高額貸与予定総額の 480～500 万円未満が最も高い割合を占めているが、貸与総額を 500 万円としても月平均で 10 万円を借りていることになる。

(4) 2016 年度本学奨学金希望学生の成績と他の奨学金の受領状況

本学独自の給付型奨学金である仙台白百合女子大学奨学金の採用者は 14 名おり、その採用条件は「前年度の学業成績が学科の上位 3 分の 1 程度」となるため、採用者 14 名の学業成績は優秀と言える。

14 名の本学奨学金以外の貸与元は、日本学生支援機構が 12 名（85.7%）で、うち日本学生支援機構の一種及び二種の併用貸与をしている学生が 3 名いる。3 名中 1 名は、一種 54,000 円、二種 120,000 円と最高額を貸与している学生が心理福祉学科に在籍している。

本学奨学金の不採用者は 8 名で、理由は家計基準による不採用であった。また、8 名中奨学金の貸与がない学生は 2 名で、残る 6 名は日本学生支援機構を貸与しており、6 名中 1 名は、一種の家計基準を満たしていないが、二種の最高額 120,000 円を借りている。

3. おわりに

本学では、在籍者の 53.2%が日本学生支援機構の奨学金を借りており、学科別では健康栄養学科が貸与者並びに高額返済予定者の割合が高い傾向にある。奨学金を借りる理由では、学生の自宅・自宅外通学による生活状況や、保護者の収入事情が大きく影響していると思われる。

最近では、日本学生支援機構の返還で自己破産するニュースも報道されており、奨学金は学生本人が抱える借金という意識付けが重要であり、容易に借りることはできても必ず返済義務が発生する旨を理解させる必要性がある。

学生課では募集、採用、継続、返還等の手続きの際に十分な説明会を開催しており、加えて一人ひとりと対面しながら丁寧な説明を行い、返済の義務を説明するよう努めている。

今後も少人数だからこそできる指導を継続すると共に、本学独自の給付奨学金及び無利子奨学金の増設を検討したい。

「CAP・GPAの導入に伴う学習動向に関する調査」単純集計

実施時期：2017年12月4日（月）～12月22日（金）

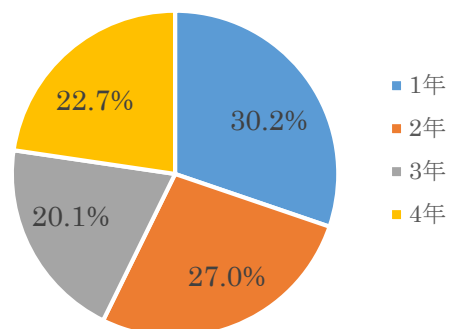
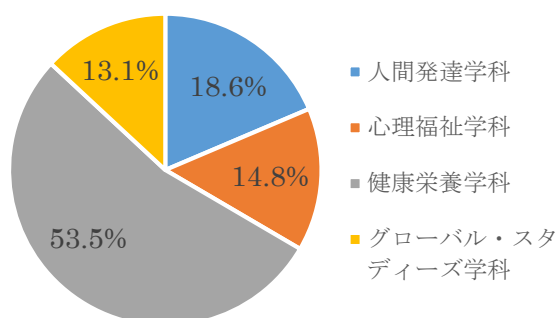
回答人数：344人

1. 所属等について

（1）あなたの所属する学科を教えてください。

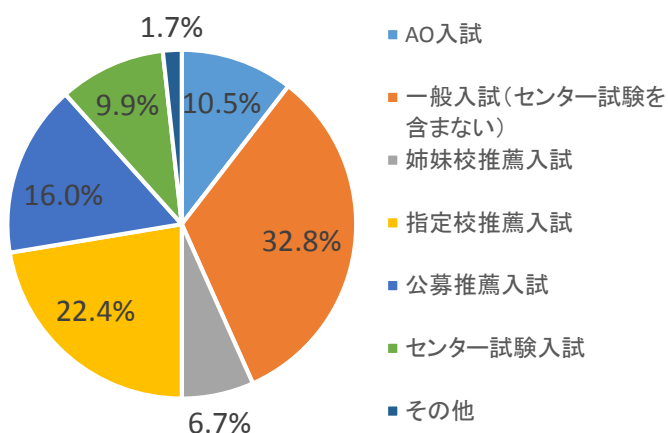
（2）あなたの学年を教えてください。

	1年	2年	3年	4年	
人間発達学科	22	13	20	9	64
心理福祉学科	17	10	9	15	51
健康栄養学科	42	61	32	49	184
グローバル・スタディーズ学科	23	9	8	5	45
	104	93	69	78	344



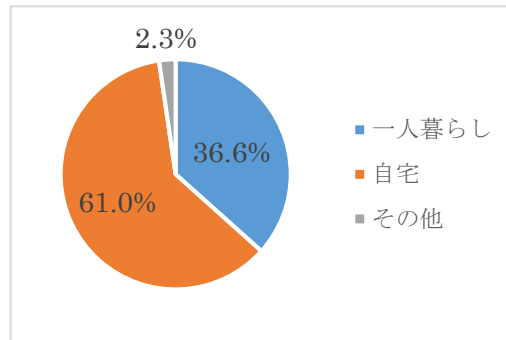
（3）あなたの入試の時の形態を教えてください。

AO入試	36
一般入試（センター試験を含まない）	113
姉妹校推薦入試	23
指定校推薦入試	77
公募推薦入試	55
センター試験入試	34
その他	6



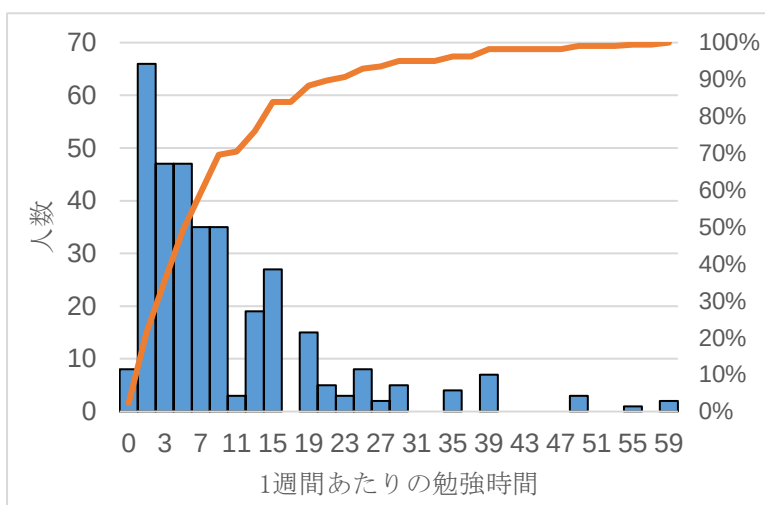
(4) あなたの居住形態について教えてください。

一人暮らし	126
自宅	210
その他	8



2. 日々の学習状況について

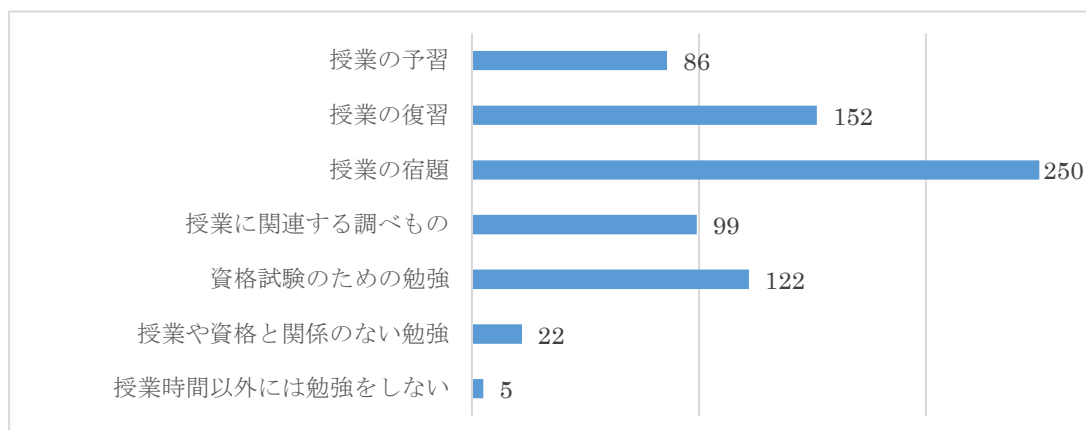
(1) あなたは、授業時間以外に、「1週間」あたり何時間くらい、勉強していますか？



最小	0
最大	100
平均	10.4
中央値	7
最頻値	3

(2) 授業時間以外の勉強の内容は、主にどのようなものですか？以下の選択肢からお選びください。

(複数回答可)

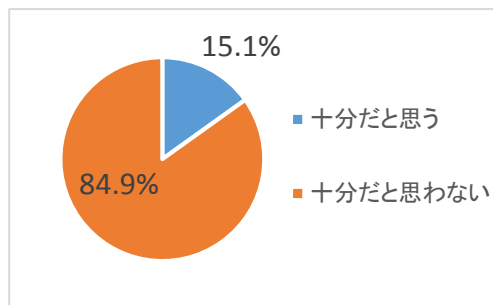


【その他】

- ・テスト勉強 (3)
- ・卒業論文
- ・通信教育の勉強
- ・模擬授業準備
- ・自分の研究

(3) あなたは、自分の授業時間以外の勉強時間が十分だと思いますか？

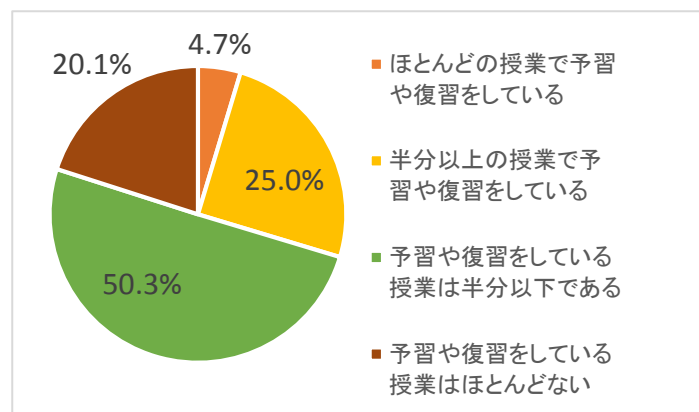
十分だと思う	52
十分だと思わない	292



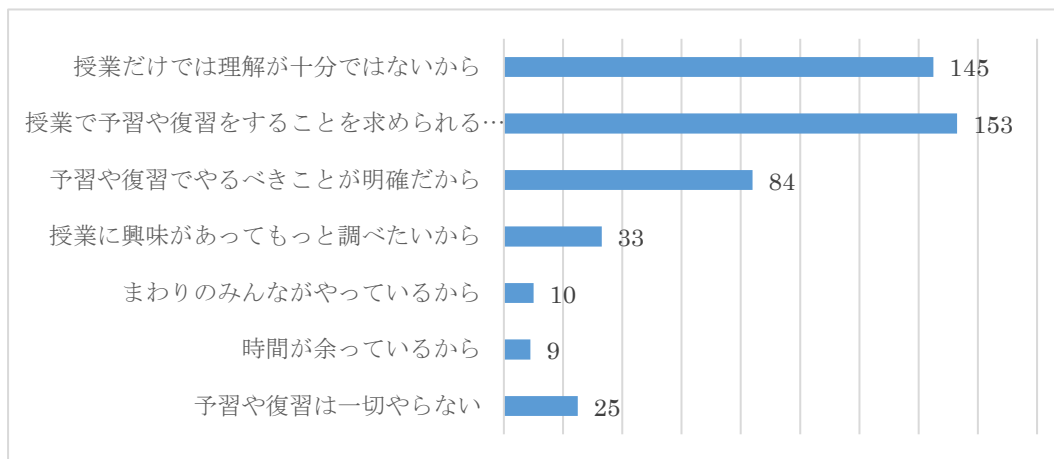
3. 授業の予習・復習について

(1) あなたの履修している授業で、予習や復習などの自習をしている授業はどのくらいありますか？

ほとんどの授業で予習や復習をしている	16
半分以上の授業で予習や復習をしている	86
予習や復習をしている授業は半分以下である	173
予習や復習をしている授業はほとんどない	69



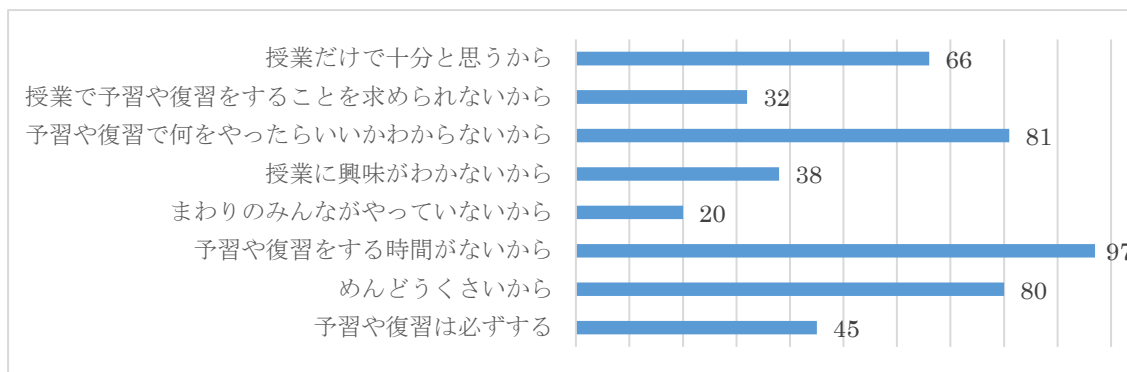
(2) あなたが授業の予習や復習をするのはなぜですか？（複数回答可）



【その他】

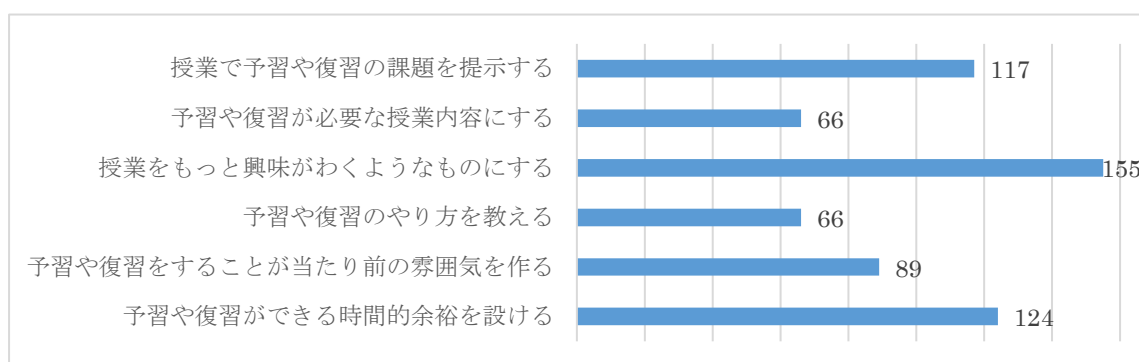
- ・理解度が低いときだけ
- ・ある程度理解した上で授業を受けたい
- ・テスト勉強のための復習
- ・4年はほとんど講義はなく、国家試験の勉強をしている。
- ・資格試験のため
- ・先生からの指示
- ・資格取得のため
- ・予習しないことで全体の授業のペースが滞るのが嫌
- ・中学・高校で既に予習復習の習慣が身に付いていたから

(3) あなたが授業の予習や復習をしないのはなぜですか？（複数回答可）



- 【その他】
- ・時間がない
 - ・興味のあることに費やす時間を優先するから。また、課題などで強制されるのが好きではないため。
 - ・時間がないから
 - ・講義はほとんどないから
 - ・やっている
 - ・課題が多い
 - ・やる気が出ない
 - ・時間がない、忙しい
 - ・しなくてもいい授業内容の場合が多い
 - ・自分の時間の使い方が下手だから
 - ・時間が足りない
 - ・バイトがあるから
 - ・自分なりに頑張って復習に重点を置き勉強しているが、全授業分の勉強するには時間が足りない。
 - ・やらないとは思いますが、やる気おきない。予習復習自体を忘れてしまう。

(4) 授業でもっと予習や復習をするようになるには、どうすればいいと思いますか？（複数回答可）

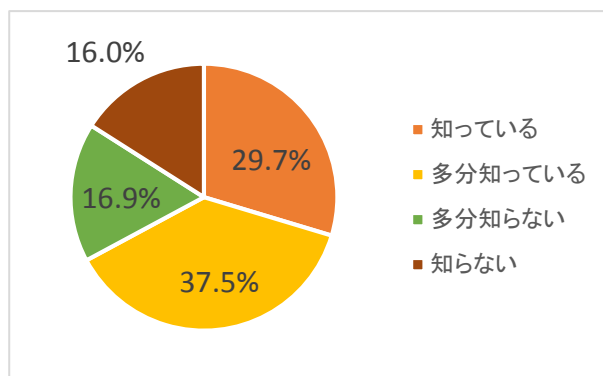


- 【その他】
- ・わかりません
 - ・必要ない人はやらなくても良いと思う。
 - ・課題の量を見直す(課題の質と量が不適切な授業がある)
 - ・課題を減らす
 - ・専門教科の補講や英語などのようにリメディアルをつくってほしい
 - ・予習をしていない事で一度恥をかければ良い

4. CAP 制について

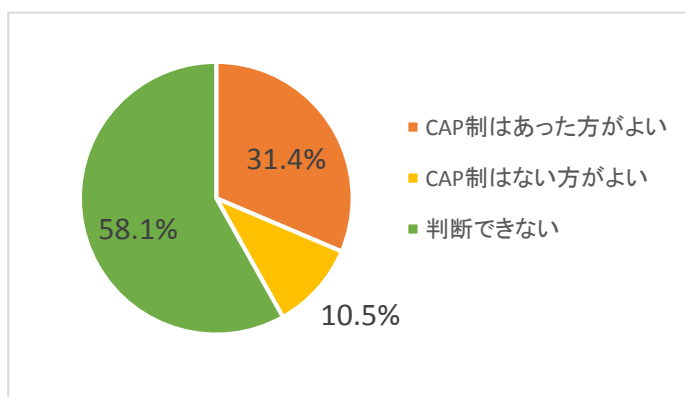
(1) あなたはなぜ CAP 制が設けられているか、その理由を知っていますか？

知っている	102
多分知っている	129
多分知らない	58
知らない	55



(2) あなたは CAP 制があることについて、どう思いますか？

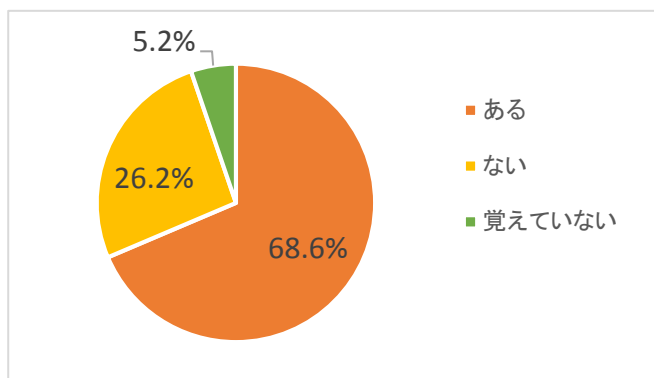
CAP 制はあった方がよい	108
CAP 制はない方がよい	36
判断できない	200



5. 学習計画について

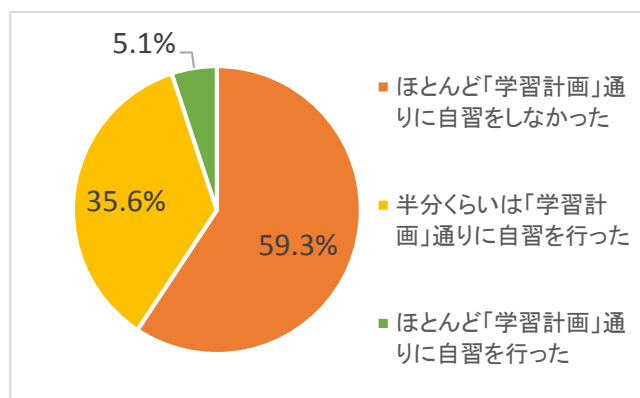
(1) あなたはこれまで、「学習計画」を提出し、年 50 単位以上を履修登録したことがありますか？

ある	236
ない	90
覚えていない	18



(2) あなたは「学習計画」通りに自習をしましたか？

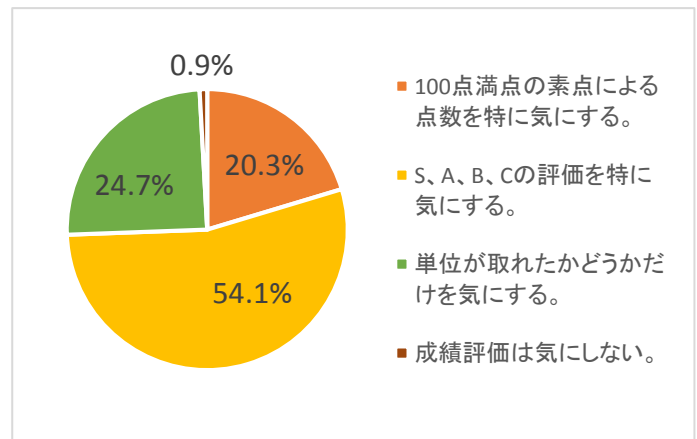
ほとんど「学習計画」通りに自習をしなかった	140
半分くらいは「学習計画」通りに自習を行った	84
ほとんど「学習計画」通りに自習を行った	12



6. GPA と成績評価について

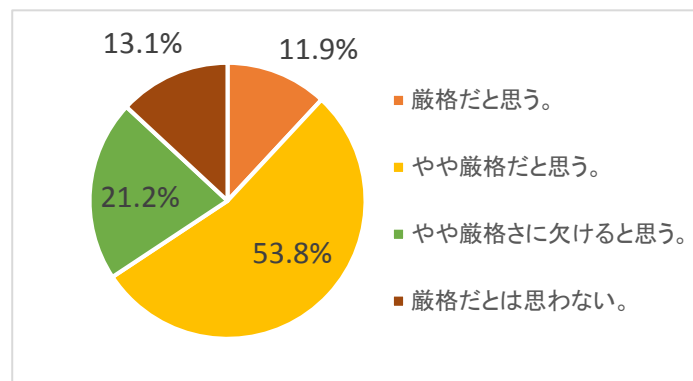
(1) 成績評価について、何を特に気にしていますか？自分に一番当てはまるものを教えてください。

100 点満点の素点による点数を特に気にする。	70
S、A、B、C の評価を特に気にする。	186
単位が取れたかどうかだけを気にする。	85
成績評価は気にしない。	3



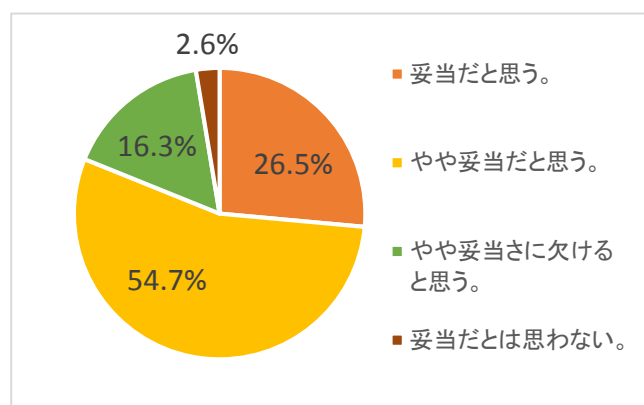
(3) あなたは本学の成績評価について、全体的に厳格だと思いますか？

厳格だと思う。	41
やや厳格だと思う。	185
やや厳格さに欠けると思う。	73
厳格だとは思わない。	45



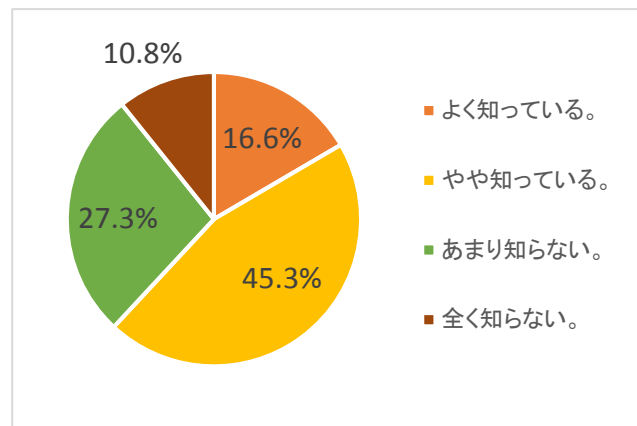
(5) あなたは本学の成績評価について、全体的に妥当だと思いますか？

妥当だと思う。	91
やや妥当だと思う。	188
やや妥当さに欠けると思う。	56
妥当だとは思わない。	9



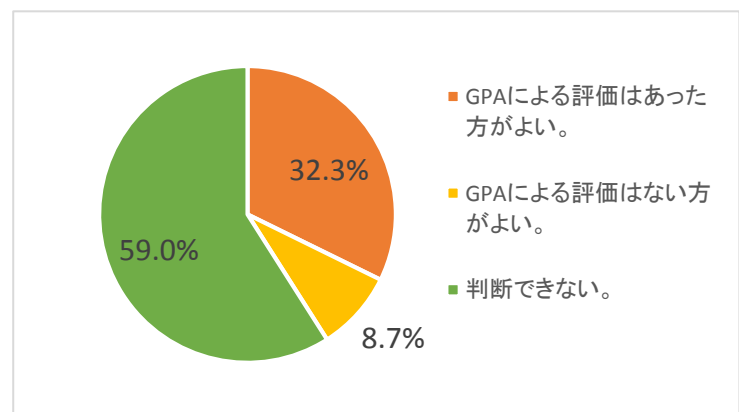
(7) 本学では、現 1～3 年生を対象に GPA による成績評価を導入しています。GPA について知っていますか？

よく知っている。	57
やや知っている。	156
あまり知らない。	94
全く知らない。	37



(8) あなたは GPA による評価についてどう思いますか？

GPA による評価はあった方がよい。	111
GPA による評価はない方がよい。	30
判断できない。	203



学生生活調査（4 年生対象：卒業近時期）

教育・研究推進委員会

本調査は、4年生を対象に卒業まじかの3月上旬に実施したものである。4年間の学生生活を、当然ながら批判的な意見や思いもふくめて振り返ってもらい、今後の大学の教育に活かしたいとして行ったものである。

1月末に1年～4年生までの学習調査、主にCAP制についての調査を行ったこともあって、本調査を3月という時期に設定したのであるが、回収率が悪く学科の偏りも大きい結果となった。回収率は36%（75）で、健康栄養学科と心理福祉学科の学生の回答が60%を占めた。それゆえ、学科別の比較ができないことになったので、以下の分析は単純集計の結果である。

I 大学生生活における諸活動

「大学生活に関連する（1）～（9）について、あなたはどのように思っていますか」について必要だったかどうかを4択（必要・やや必要・あまり必要ではない・必要ではない）で回答してもらった。

「大学の授業」や「人・同級生・教員との出会い・交流」への必要の割合が高かった。他方、あまり必要でないとする割合が「クラブ・サークル活動」で高いが、この数値は、実際に参加しなかった結果によってそのように思うのか、本学の活動が不活発と思えてそうだったかは不明であるが、意外であった。

II 大学で身についたこと

「（1）～（9）のことがらや能力について、大学で学んで身についたと思いますか」について4択（身についた・やや身についた・あまり身につけてない・身につけてない）で回答してもらった。

「自分の就きたい仕事に直接関係する知識・技術」については、過半数の学生が身についたとしている。これは回答学生に実学の分野の学生が多いからだったのだろうか。次に、「幅広い視野から物事を考えることができる能力」や「自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力」についても身についたとした学生が多く、大学で教育を受ける意義や価値につながるものである。

他方、「外国語を理解し会話する能力」、「幅広い知識（政治経済・歴史・文学・芸術・科学等）」、「コンピュータに関する知識や技能」については4人に1人以上は身につけていないとしている。大いに考えさせる結果である。

Ⅲ～Ⅴのグラフは、＜入学前に期待していたこと＞、＜本学で学んで良かったこと＞＜本学で学んで期待外れだったこと＞について、下記の（1）～（10）の中から3つを選択するとした質問の結果を表している。

- (1) 教育内容（資格取得に関係する内容）
- (2) 教育内容（資格取得に直接は関係しない内容）
- (3) 教員の指導
- (4) 留学
- (5) 実習
- (6) 就職
- (7) 友人関係
- (8) クラブ・サークル活動
- (9) ボランティア活動
- (10) 設備・施設
- (11) その他（具体的な内容を書いて下さい）

Ⅲ 入学前に期待していたこと

「教育内容（資格取得に関係する内容）」が8割弱と最も高い期待を持っていたことであり、次に「友人関係」が続く。他方、「教育内容（資格取得に直接は関係しない内容）」や「留学」「設備・施設」については期待していないという結果である。

Ⅳ 本学で学んで良かったこと

入学前の期待の傾向と重なるように「教育内容（資格取得に関係する内容）」が7割弱と本学で学んでよかったとしている割合が最も高い。次に、「友人関係」や「実習」に約半数近くの学生が良かったとしている。

Ⅴ 本学で学んで期待外れだったこと

「クラブ・サークル活動」については半数以上の学生が期待外れだったとしている。また、「教員の指導」についても3人に一人近くが挙げている。入学時に期待の高かった「教育内容（資格取得に関係する内容）」や期待しなかった「設備・施設」についても期待外れ感を持っている。

この質問は、上記の「本学で学んで良かったこと」の裏返しでもあるから「実習」「就職」「友人関係」についての期待外れの低いことは、当然である。

Ⅵ 大学でもっと学びたいと思うこと

「大学でもっと学びたいと思うことはどんなことですか」という質問は、選択肢としてレベルの異なる次元にならざるをえなく、下記の4つとした。

- (1) 就職や仕事上、役に立つこと
- (2) 私生活を豊かにするために役に立つこと
- (3) 人生を通じてすべての面で役に立つこと
- (4) 学ぶことの楽しさ

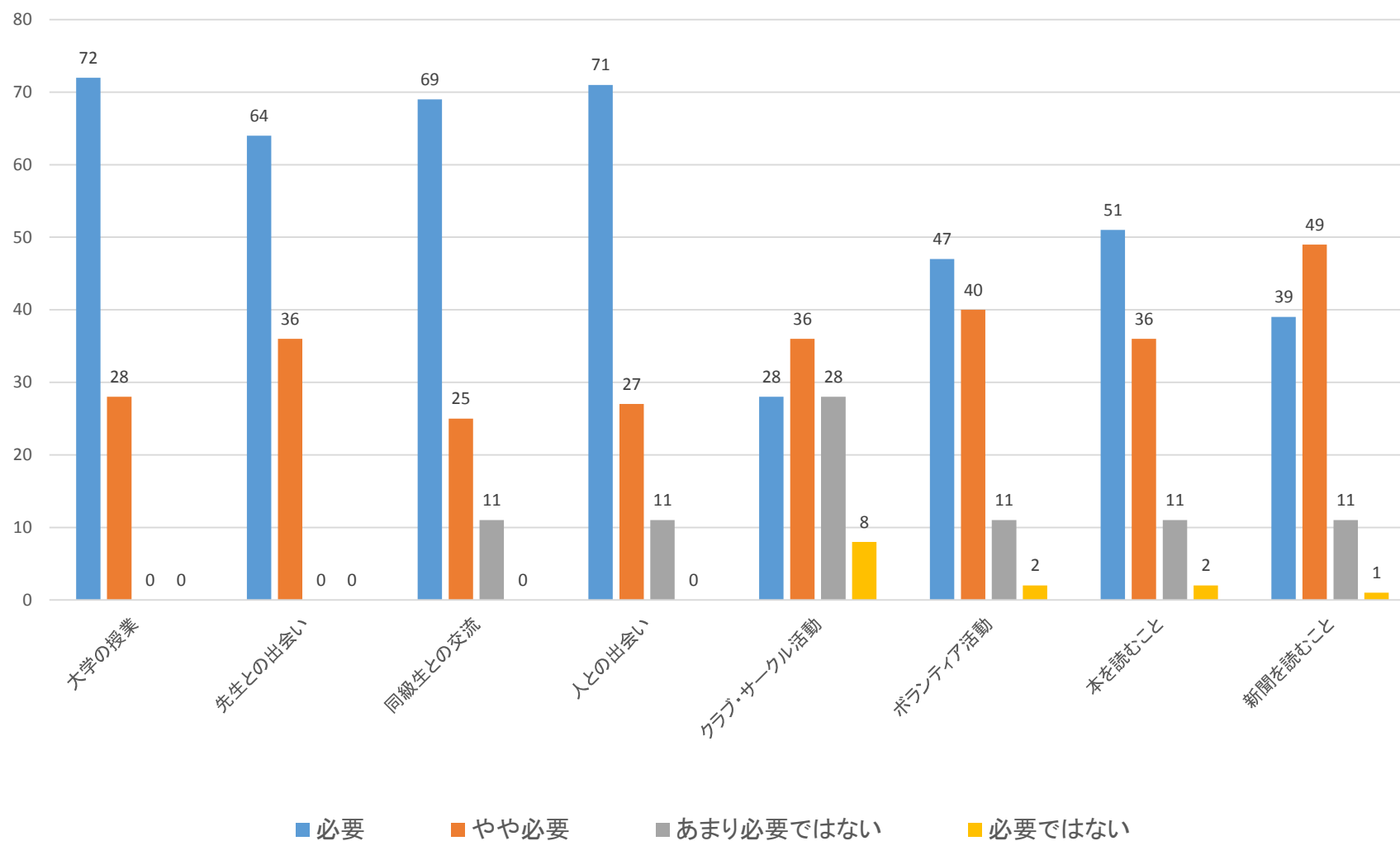
円グラフで分かるように、「人生を通じてすべての面で役に立つこと」と「学ぶことの楽しさ」とで回答が2分された。

VII 大学生活への満足感

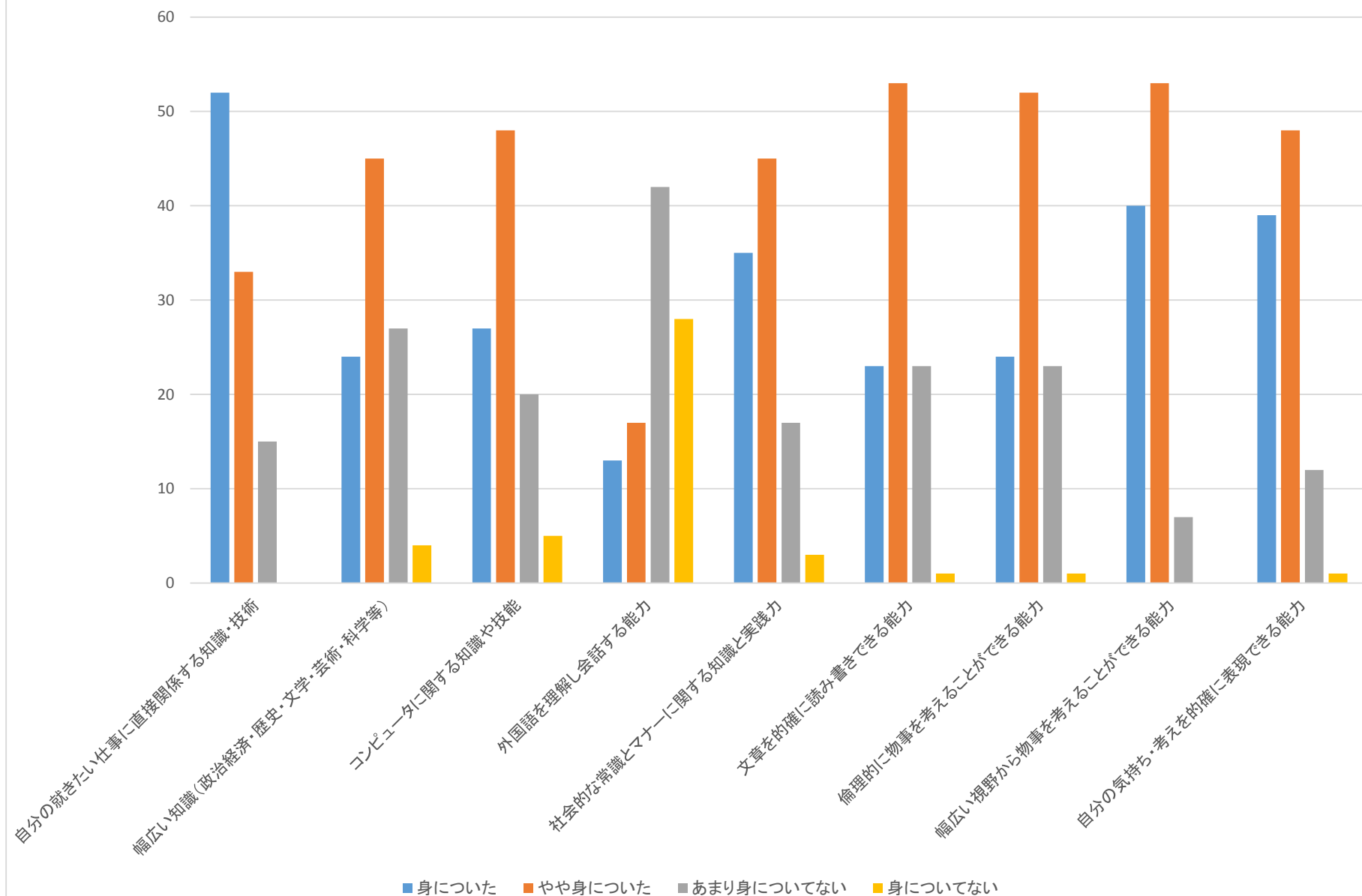
「大学生活を総合的に見て、満足していますか」について、4 択（満足している・やや満足している・あまり満足していない・満足していない）で回答してもらった。

円グラフのように、約 9 割の学生が、満足と答えていることが分かった。このことは、このアンケートに回答を出したところからも窺えるともいえよう。

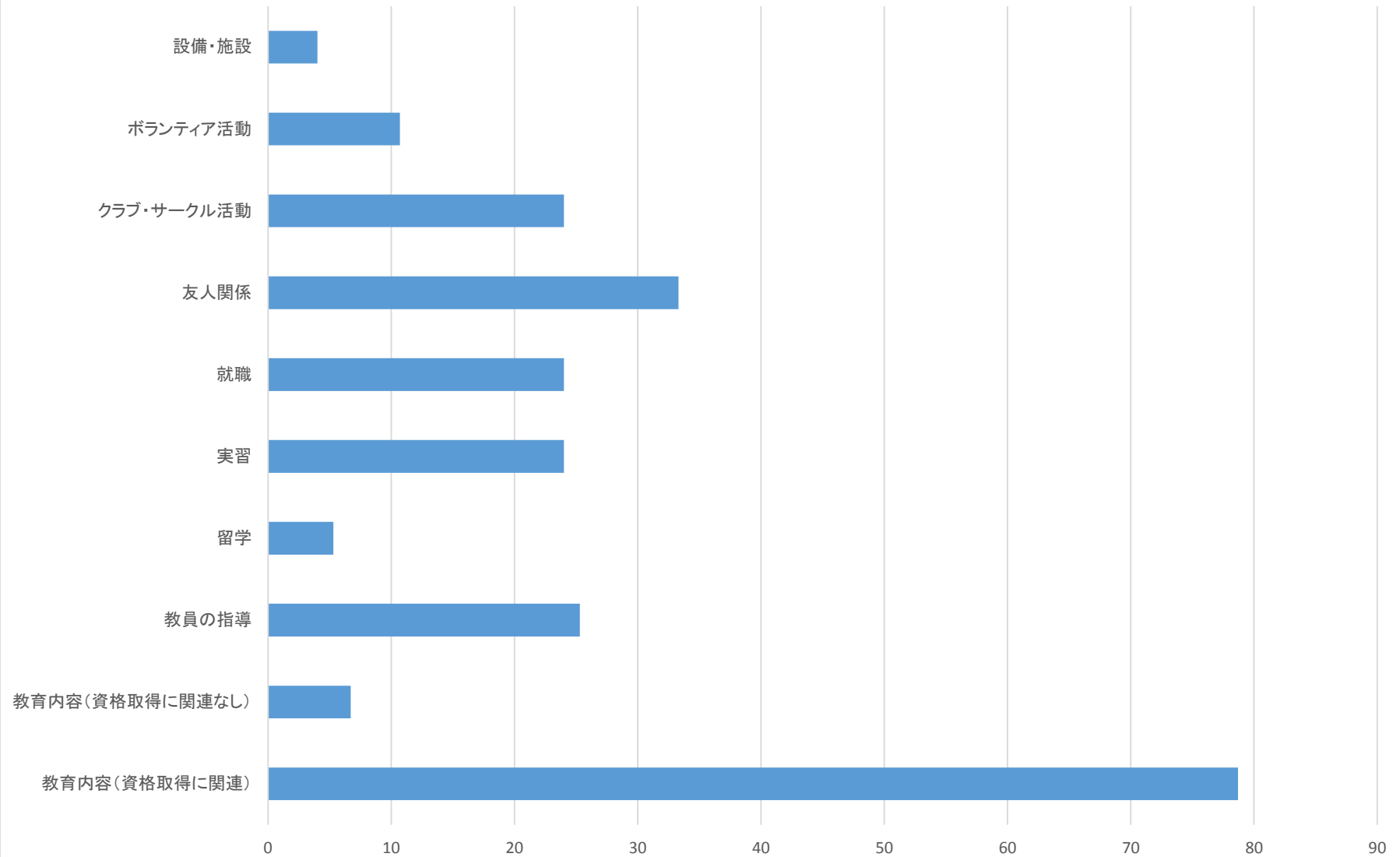
I 大学生活における諸活動



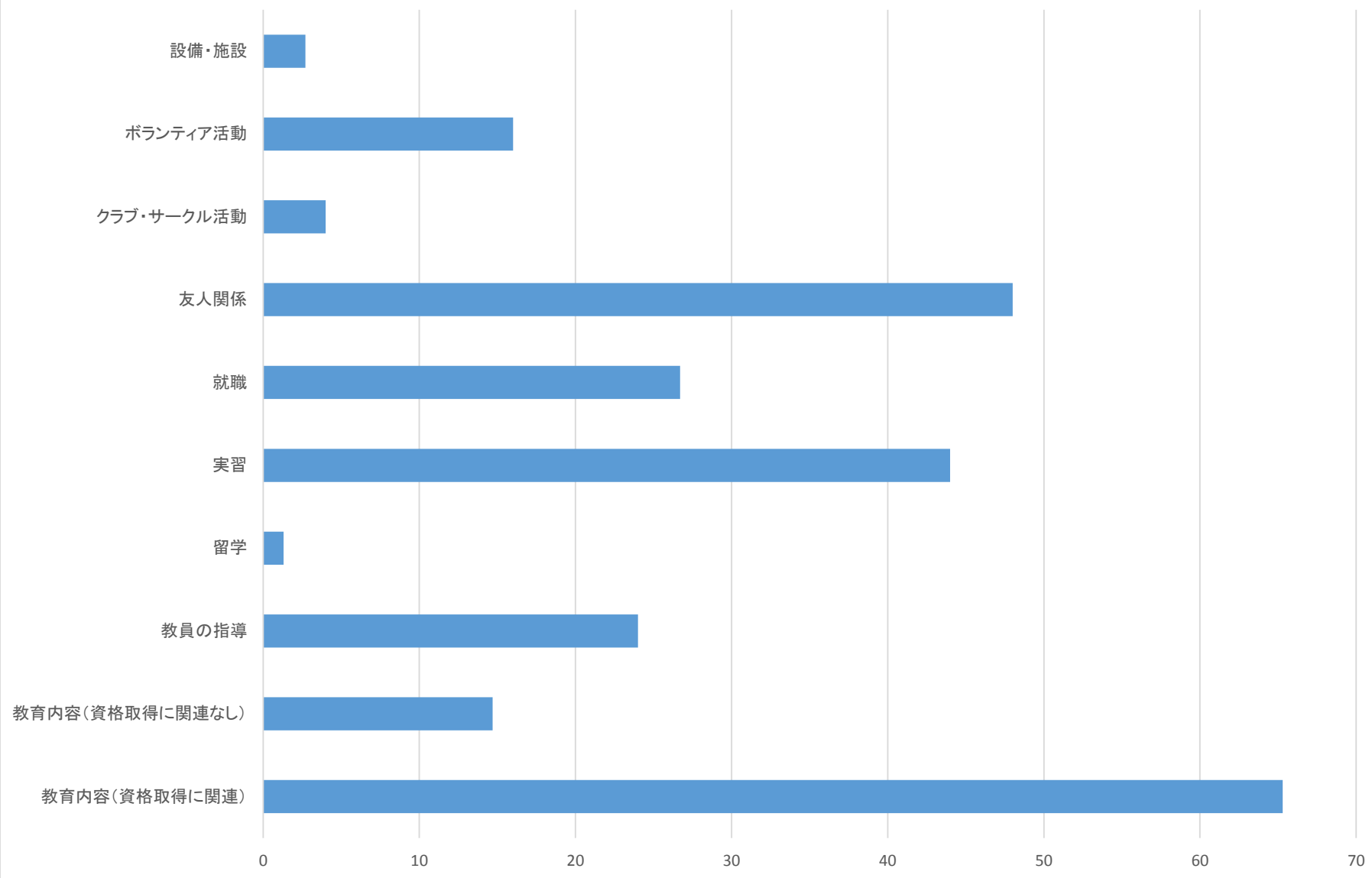
Ⅱ 大学で身についたこと



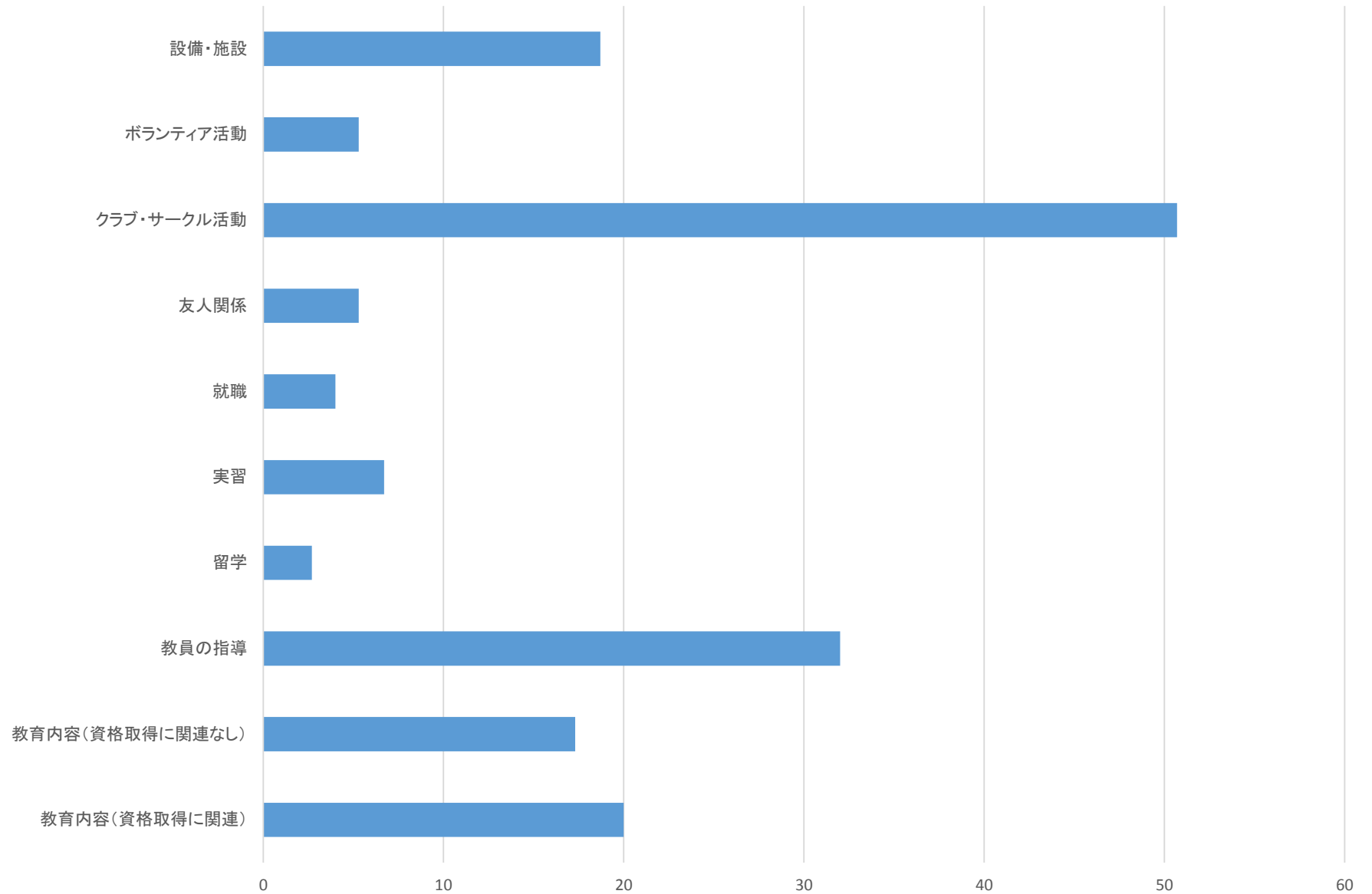
Ⅲ 入学前に期待していたこと



IV 本学で学んで良かったこと

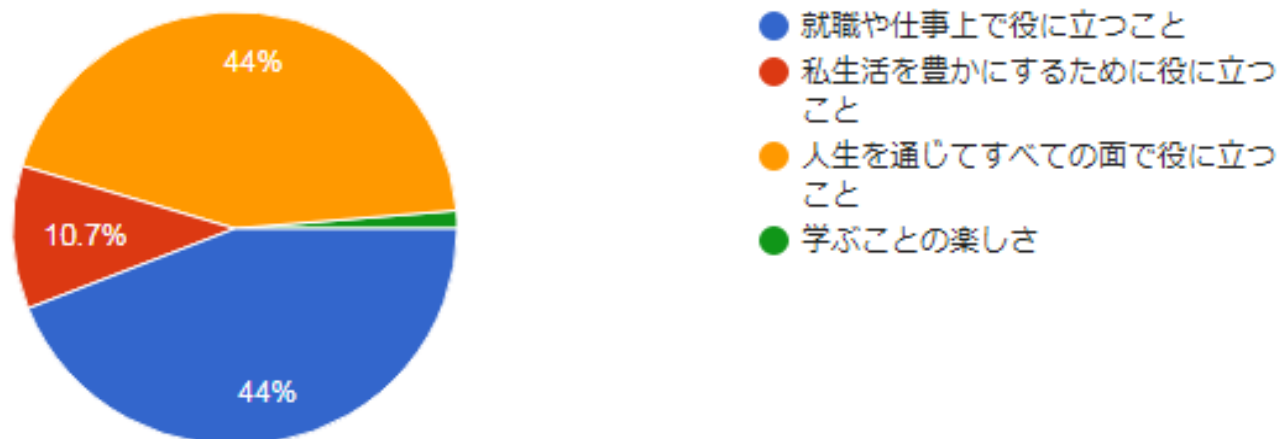


V 本学で学んで期待はずれだったこと



VI 大学でもっと学びたいと思うことはどんなことですか？

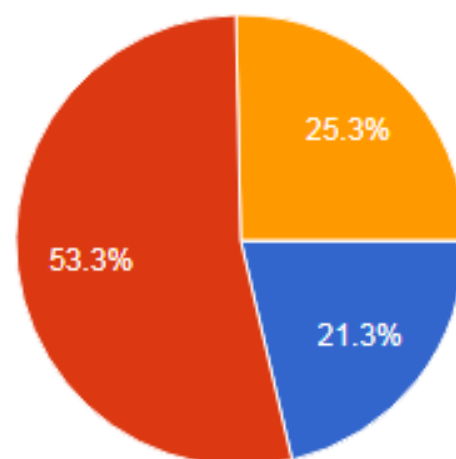
75 件の回答



VII 大学の授業に満足していますか？



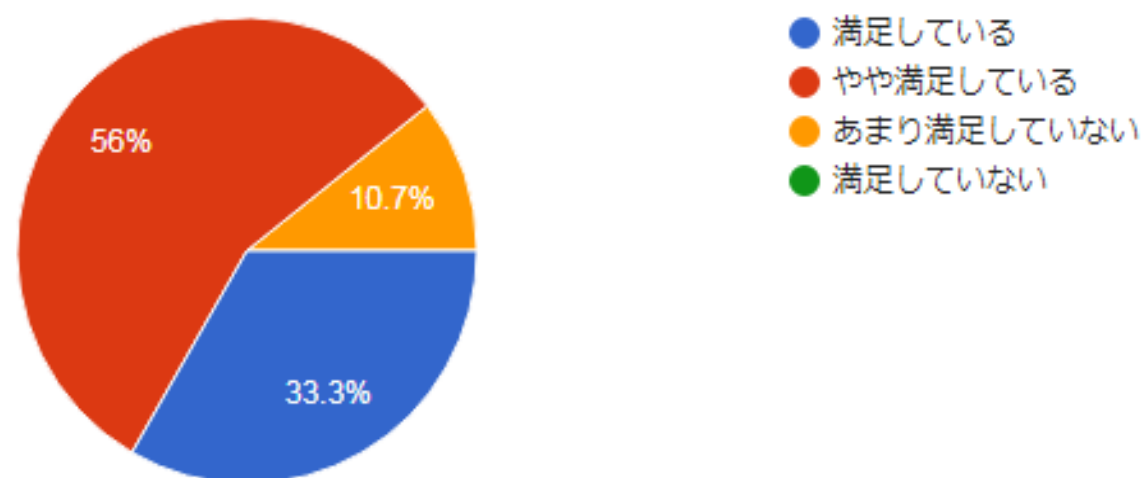
75 件の回答



- 満足している
- やや満足している
- あまり満足していない
- 満足していない

VIII 大学生活を総合的にみて、満足していますか？

75 件の回答



IX 最後に、大学や大学生活に関して、ご意見や感想があればご自由にお書き下さい（任意回答）

11 件の回答

ピアノは自由に使えるようなことを謳っていたのに、使っている時に使用届けの必要性を言われたことやピアノの台数がもう少しあれば良かった。難しいとは思いますが、2年で専門的なことを習うが実際、実習に行った3年の方が理解できるので、軽く復習する時間を設けられれば定着しやすいと感じた。

教務課や学生課が情報を流すのが遅い。特に精神医学の授業が6コマに変更になったのを直前に告げられたのは不親切だと感じた。

科目によって指導の差がありすぎる。ゼミ教育格差でも言えることだと思う。

資格に必要な知識だけでなく、一社会人としてのマナーや教養なども学ぶことができたと思います。四年間ありがとうございました。

大学4年の卒論という大事な提出期限前に担当教諭の私情（家庭的な事情）に振り回され、満足な指導を得られなかったことに関し非常に残念であった。家庭がある以上仕方の無いことではあると思うが、時期や生徒の不安についてもう少し考えてほしいと思います。

なぜ一年毎に学生に対してこのようなアンケートを実施しないのかずっと疑問でした。授業に対するアンケートも大事ですが、大学生活に対するアンケートも実施するべきだと思います。学生課か教務課、キャリア支援課や先生達への授業外での要望などどこに言えばいいのかわかりませんでした。また、4年次になって国試の勉強や就活などで学校に行かない日が増えるのに、卒業や就活、国試に関する大事なお知らせを掲示板に貼るのはおかしいと思います。1人1人、G-mailがあるんだから4年生に対してはG-mailでもいいのではないのでしょうか。女性だからタバコを吸わない方がいい、お酒はあんまり飲まない方がいい等をたくさん聞きました。確かにタバコやお酒はほどほどがいいと思いますが「女性だから」という言葉を聞くのが嫌でした。そのために女子大に入ったわけではありません。女性の社会進出とか言ってるのに先生達や学生課などの方たちが「女性だから」という言葉を使ったら意味ないと思います。

一生付き合っていきたいと思えるゼミの先生や友人と出会えたことが、大学に入って良かったと思えることです。

ゼミの指導の差に良くも悪くもばらつきがある。

学費を何に使ってるのか示してほしいねと友人と話してました。決して安い額ではないので、明細を知ることにより学生生活を無駄にしないようにしようとする気持ちが芽生えるのではないかと考えます。

毎年の健康診断や何かしらの物事で私たちの学科が毎回最後にされているのが不満でした。責めてローテーションで回してほしいかったです。

国試の対策で学外の講師に頼りすぎていたような気がした。プレッシャーばかりかけられていて、具体的に先生からの指導はあまり生かされていなかった。

小嶋先生の個人的に聞いてくれた国試直前対策会はとても役に立った。

白百合で良かったです

学生生活調査（４年生対象：卒業近時期）

皆さんは、仙台白百合女子大学に入学してから４年間が経ち、いよいよ卒業式を迎えようとしています。このアンケートは、４年生の皆さんに学生生活をふり返って頂くものです。皆さんの回答は集計し、大学の改善のために使います。目的外の使用は絶対に致しません。

2018年３月 仙台白百合女子大学

■記入の仕方：（ ）のなかに英字や数字で回答して下さい。

また、その他については、（ ）に適切な内容を記述して下さい。

1. 大学生生活に関連する（１）～（９）について、あなたはどのように思っていますか。

それぞれについて、A, B, C, Dで答えて下さい。

A 必要 B やや必要 C あまり必要ではない D 必要ではない

- （１）大学の授業 （ ）
- （２）先生との出会い （ ）
- （３）同級生との交流 （ ）
- （４）人との出会い （ ）
- （５）クラブ・サークル活動（ ）
- （６）ボランティア活動 （ ）
- （７）本を読むこと （ ）
- （８）新聞を読むこと （ ）
- （９）その他（具体的な内容書いて下さい。 ）

2. 次の（１）～（９）のことがらや能力について、大学で学んで身についたと思いますか？

A 身についた B やや身についた C あまり身についてない D 身についてない

- （１）自分の就きたい仕事に直接関係する知識・技術 （ ）
- （２）幅広い知識（政治経済、歴史、文学、芸術、科学など）（ ）
- （３）コンピュータに関する知識や技能 （ ）
- （４）外国語を理解し会話する能力 （ ）
- （５）社会的な常識とマナーに関する知識と実践力 （ ）
- （６）文章を的確に読み書きできる能力 （ ）
- （７）論理的に物事を考えることができる能力 （ ）
- （８）幅広い視野から物事を考えることができる能力 （ ）

- (9) 自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力 ()
- (10) その他 (具体的な内容を書いて下さい。)

3. 次のⅠ・Ⅱ・Ⅲのそれぞれについて、下記の(1)～(10)から選んで下さい。
最大3つまで複数選択可能です。

- Ⅰ 入学前に期待していたこと () () ()
- Ⅱ 本学で学んで良かったこと () () ()
- Ⅲ 期待はずれだったこと () () ()

- (1) 教育内容 (資格取得に関係する内容)
- (2) 教育内容 (資格取得に直接は関係しない内容)
- (3) 教員の指導
- (4) 留学
- (5) 実習
- (6) 就職
- (7) 友人関係
- (8) クラブ・サークル活動
- (9) ボランティア活動
- (10) 設備・施設
- (11) その他 (具体的な内容を書いて下さい。)

4. 大学でもっと学びたいと思うことはどんなことですか? ()
- (1) 就職や仕事上、役に立つこと
- (2) 私生活を豊かにするために役に立つこと
- (3) 人生を通じてすべての面で役に立つこと
- (4) その他 (具体的な内容を書いて下さい。)

5. 大学生活を総合的にみて、満足していますか? ()
- A 満足している B やや満足している C あまり満足していない D 満足していない

質問はこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。